フィリピン

平成10年1月12日～1月17日

社団法人 国際交流サービス協会

I. 調査目的

1. 調査目的

・帰国青年との再交流を通じ、日本での研修成果のフォローアップと日本理解の更なる増進を図る。

・フィリピン側と日本におけるプログラムに関する意見交換や相手国事情の相互理解を通じ、今後のプログラムの改善に寄与する。

・日本側のカウンターパートと帰国青年との再交流を通じ、本事業を相互の青年交流へと発展させる。

・青年の所属先関係者に対し、本事業の理解の促進と青年への支援を働きかける。

・帰国青年同窓会との交流を通じて、相互の協力関係の増進を図る。

2. 調査内容

(1) 国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency, JICA) フィリピン事務所訪問

・フィリピンの国情一般、JICA の青年招へい事業運営状況概要の聴き取り。

・本調査の結果 (概要) の報告。

(2) フィリピン外務省

・青年招へい事業運営状況に関する意見交換。

(3) フィリピン帰国青年同窓会

・組織活動状況の聴き取りと、青年招へい事業に関する意見交換と要望事項聴き取り。

(4) 帰国青年との交流

・帰国青年と日本側カウンターパートとの再交流。

(5) 帰国青年活動現場 (職場) 訪問

・帰国青年が滞日経験をどのように職場や帰国後の生活に生かしているかを調査。

3. 調査団員

	氏　名	所　属　先	青年招へい事業との関わり
リーダー	来島　誠哉	海上保安庁 警備救難部運用指令室	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者
メンバー	内田　雅幸	上尾市役所 企画財政部自治振興課	分野別地方プログラム担当者 分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者
メンバー	柳澤　文彦	郵政省 首席監察官室	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者
メンバー	曲木　俊博	国際交流サービス協会 国際交流部受入第二課	分野別都内プログラム担当者

II. 調査結果

1. 日程

平成 10 年

1 月 12 日（月）

09:45　成田空港発（JL741 便）

13:25　マニラ国際空港着

15:00　マンダリン・オリエンタルホテル チェックイン

16:00　JICA フィリピン事務所訪問・滞在中の日程打ち合わせ

18:30　帰国青年と打ち合わせ

1 月 13 日（火）

09:30　フィリピン外務省訪問

16:00　フィリピン同窓会と意見交換

19:00　調査チーム主催夕食会

1 月 14 日（水）

08:30　帰国青年活動現場（United Nations Development Programme）

10:30　帰国青年活動現場（The Livelihood Corporation）

14:30　帰国青年活動現場（President Management Staff）

17:30　帰国青年活動現場（Department of Tourism）

1月15日(木)

09:00　市内視察

19:00　JICAフィリピン事務所へ調査報告

20:30　帰国青年と夕食会

1月16日(金)

09:00　帰国青年活動現場(National Economic and Development Authority)

11:00　プロジェクト視察(Villa Escudero)

20:00　帰国青年との夕食会

1月17日(土)

09:00　帰国青年と朝食会

11:00　ホテルチェックアウト

14:45　マニラ国際空港発(JL742便)

19:40　成田空港着

2.　主要面談者

(1) JICA事務所

後藤　洋　　所長

黒柳　俊之　　次長

石賀　みちる　職員(研修担当)

Ms. Jacqueline I. Ortiz(研修担当)

(2) フィリピン外務省

Assistant Secretary of Asian & Pacific Affairs	Mr. Juanito Jarasa
Director of Northeast Asia Division	Mr. Ernesto Castro

(3) フィリピン帰国青年連絡組織(同窓会・PAJAFA-21)

President	Ms. Evangelina G. Lawas	(1986年度アセアン混成公務員)
Vice President	Mr. John Y. Atilano	(1995年度アセアン混成経済)
Active Member	Ms. Maritess A. Hipolito	(1994年度社会福祉)
Active Member	Ms. Eva M. Guevara	(1994年度社会福祉)
Active Member	Ms. Joy Santos Deleon	(1994年度社会福祉)

(4) 帰国青年活動現場(職場)

イ. United Nations Development Programme(国連開発計画)

Ms. Bella M. Evidente (1997年度アセアン混成経済)

Mr. Shunichi Murata (Deputy Resident Representative)

ロ. Livelihood Corporation(生活支援協同組合)

Ms. Madeleine Sylvia Francisco(1997年度社会開発)

ハ. Office of the President(大統領府)

Ms. Edilha L. Martin (1997年度アセアン混成経済)

Mr. Dan Encinas (Director of Presidential Management Staff)

ニ. Department of Tourism(観光省)

Ms. Marites M. Torres (1997年度社会開発)

Ms. Cecil V. Aranton (National Capital Region, Guide)

ホ. National Economic Development Authority(国家経済開発庁)

Ms. Carmina O. Luna (1997年度アセアン混成経済)

Ms. Vivian O. Longbian (1997年度アセアン混成)

(5) 帰国青年との交流会

夕食会(1月15日・16日)

Ms. Edilha L. Martin

Ms. Marites M. Torres

Ms. Carmina O. Luna

Ms. Vivian O. Longbian

Ms. Josephine Duque

Ms. Ruth R. Lozares

Ms. Edna David Dizoa

Ms. Jennifer O. Panganiban

朝食会(1月17日)

Ms. Maritess A. Hipolito

Ms. Bella M. Evidente

Ms. Medeleine Sylvia Francisco

3. 調査結果概要

・青年招へい事業に対するフィリピン側の評価

帰国青年の職場を訪問し、帰国後の効果などに関する調査を行った。青年の職場では彼らに対し色々な面で期待することが多くみられ、本事業に対しても高い評価をいただいた。

今回職場を訪問した青年の来日時におけるテーマは「社会開発」「経済」と分野が多様であったが、ヒヤリングを通じて青年の口から、参加した分野の研修はもちろんのこと、日本の社会、生活様式においても影響(効果)を受けていることを聞かされた。青年招へい事業の目的として、日本について全般的に理解してもらうことが含まれていることを再認識した。

フィリピンの参加青年は公務員や国際機関、団体職員がほとんどで一般企業からの参加者が少ない。原因は長期にわたるプログラムであり、この期間職場を離れることについていかに理解を得る事ができるかが今後の課題と思われた。

・帰国青年との意見交換及び、交流の継続について

合宿セミナー参加青年、ホストファミリーとはクリスマスカードなどのやりとりや、Eメールの交換、フィリピンへの訪問など交流が続いている青年も多くおり、特に混成チームで参加した青年の第三国間同士の交流が行われ、「青年招へい事業」の果たす役割の大きさ、大切さとともに、日本での合宿・ホームステイなどの内容を充実させることが交流の継続に大きなウエイトを占めている事を痛感した。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容

イ. JICA フィリピン事務所

後藤所長と平成10年度のプロジェクトに関し、9年度との相違点などについて確認を行なうと共に、フィリピン側がこの「青年招へい事業」に対して、どの程度期待を持っているのか、フィリピン国民にどの程度知れわたっているのかなどについて、また評価、人選方法など全体の様子を伺った後、「青年招へい事業」プログラム担当の石賀みちる職員、オルティス職員と日程などの打ち合わせを行った。フィリピンJICA事務所の事業内容などについては毎回アフターケア調査チームがレポートしているので省略させていただく。

ロ. フィリピン外務省

面談者：Assistant Secretary　Mr. Juanito Jarasa

Director　Mr. Ernesto C. Castro

アフターケア調査チームの訪問に対し、非常に関心を持っており調査チームの目的に対する質問が多く寄せられた。特に、日本側ODA予算が削減される情報を入手しており、平成10年度以降の「青年招へい事業」実施にどのように影響があるのか関心をもっていた。

プログラムの内容については満足するものであるが、外務省としては帰国後の青年との接点が無い為に、日本での評価会、アンケートの結果を知りたいとのことであった。又、同窓会の活動にも関心をもっていた。

「平成10年度の募集に関し、例年12月に日本政府より実施計画を知らされ、募集に入るが、今年度は今日現在まだ受け取っていない。外務省として同プログラムに関わっているスタッフは課長を含め3名なので出来る限り早く募集手続きを始めたい。」との話であった。また例年フィリピンは比較的早い陣に組み入れられているが、次年度はいつからどのようなグループを送れば良いかを心配していた。調査チーム側からも参加者のプロフィールを早く受け取れば良いプログラムが実施出来るので、お互いに協力していくことを約束した。

ハ．フィリピン帰国青年同窓会

同窓会側からは、現在活動している内容を資料・写真などで説明を受けた。

マレイシアやブルネイの同窓会との交流は活発に行われているが、他のアセアン諸国の同窓会組織とは交流が少ない。又日本に合宿参加青年・ホストファミリー・その他関係者などの組織が何故出来ていないのか疑問視していた。

フィリピンは7,000余りの島から成り立っており、マニラからのかけ声だけでは組織としての活動が限られてしまう。地方支部を充実させ活動を活発に出来るように努力をしているが、資金問題を常に抱えており日本側からの援助を期待していた。

(2) 帰国青年活動状況

イ．同窓会（PAJAFA-21）

フィリピン政府より非営利団体として認可されるほど、積極的に様々な活動をしている。特にアセアン各国同窓会との共同プログラム「小・中学生交換プログラム」実施や同窓会支部の強化、ニュースレター「KAIBIGAN-21」の発行、青年招へい事業現地プログラム・選考会への関与など帰国後も何らかの形でこの青年招へい事業に参加している様子がうかがえた。又、社会福祉活動の一環としてストリート・チルドレンのためのプログラム「Paint-A-Can」、医療奉仕活動、その他、貧しい子供達へクリスマスプレゼントなどの活動を行っているが、常に資金不足を抱えている。同窓会の会費で運営されているこれらの活動の継続には300人の会員（マニラ首都圏は50名）をい

かに増やしていくかが大切な要因と思えた。PAJAFAのメンバーは皆それぞれ仕事をもっているが、週1回は会合を開き、今後のスケジュールを話し合い、事業を計画・実施している。

ロ．帰国青年活動現場（職場）その1

勤務先：United Nations Development Programme（国連開発計画）

面談者：Ms. Bella M. Evidente（1997年度アセアン混成経済）

Mr. Shunichi Murata（Deputy Resident Representative）

「国連開発計画から『青年招へいプログラム』に参加するのは初めてのケ・・スの為、実際に申請書を提出するまでの関係各所に対するアプローチが大変であった。日本人のスタッフも常駐しており、日本への関心度は業務以外でも高いものがあった。現在はフィリピン国内の健康問題（貧困・生活レベルの向上）・紛争問題（ミンダナオ島）教育問題・農業問題に関するレポートを作成し、政府に提出している。プロジェクトの期間が3年から5年であることや、海外出張が多い職場なので比較的に席を空けることに理解を得やすいことも参加出来る要因になった。

参加したグループがアセアン混成であったために、他のアセアンの人々とも友人関係が出来、様々な比較が可能となり、広い視野が得られたことなど、大きな収穫であった。」

ハ．帰国青年活動現場（職場）その2

訪問先：Livelihood Corporation（生活支援協同組合）

面談者：Ms. Madeleine Sylvia Francisoc（1997年度社会開発）

「マルコス前大統領の肝入りで設立されたが、設立資金として用意された資金以外の補助金が1986年以降ストップしている。倹約して支援活動をしてきたが今後の目処は立っていない。日本で研修したことは現在の仕事との関係は薄いが、帰国後に職場での部下に対する接し方が変わってきた。今までは『笛ふけど踊らず』の状態で自分一人で何事も行ってきたが、帰国後は部下とのコミュニケーションを図り皆で仕事が出来るようになったのは、日本で色々な人と接し、団体生活を送ったことが非常に役立っている。再度同じプログラムに参加したり、日本に渡航することは難しいが、子供たちには是非参加させてやりたいので、『青年招へい事業』は次の世代になっても続けてもらいたい。」

ニ．帰国青年活動現場（職場）その3

訪問先：Office of the President（大統領府）

面談者：Ms. Edilha L. Martin（1997年度アセアン混成経済）

Mr. Dan Encinas (Director of Presidential Management Staff)

「各省庁より上がってくる様々な案件を大統領に報告する前に、調査、アドバイスを行ったり、逆に大統領よりの指示案件を各省庁に依頼する職務で、責任重大な仕事である。議案書の準備、法律をつくる準備、各省庁の調整などで、農業・工業関係担当である。日本におけるプログラム（中小企業）が非常に参考になっており、仕事に役立っている。」

ホ．帰国青年活動現場（職場）その4

訪問先：Department of Tourism（観光省）

面談者：Ms. Marites M. Torres（1997年度社会開発）

Ms. Cecil V. Aranton (National Capital Region)

彼女の担当は、観光産業での各種認可、それらの現場で働く人の教育、研修会の企画、将来の観光計画など、働く人々に対し様々な問題を検討していくセクションであった。「日本を実際に訪問することにより様々な方面より日本人を見て、受け入れる立場から色々と勉強になった。又、技術研修員として来日しマネージメントなどを学びたいと思っている。今年はフィリピン独立100周年なのでそのための記念イベントを盛り上げ、日本からの観光客誘致に努力して行きたい。」

ヘ．帰国青年活動現場（職場）その5

訪問先：National Economic Development Authority（国家経済開発庁）

面談者：Ms. Carmina O. Luna（1997年度アセアン混成経済）

Ms. Vivian O. Longbian（1997年度アセアン混成）

「青年招へい事業参加者の募集窓口でもあり毎年数人が参加している。特に地方事業所では全員参加経験者になっている所もある。プログラムに参加した経緯はもちろん自分の希望だが、職場側からも推薦されて参加したために、仕事の引き継ぎなどの苦労は少なかった。現在の仕事は、フィリピンの経済計画の作成をしている。主にデータを集計し、分析を行い投資を促進し、産業基盤の構築を図ることを研究している。」

(3) 交流会・セミナー

イ．交流会

出席者；調査チーム

JICA フィリピン事務所

後藤　洋	所長
石賀　みちる	職員
Ms. Jacqueline I. Ortiz	職員

同窓会

President	Ms. Evangelina G. Lawas
Vice President	Mr. John Y. Atilano
Active Member	Ms. Maritess A. Hipolito
Active Member	Ms. Eva M. Guevara
Active Member	Ms. Joy Santos Deleon

アフターケア調査チーム主催で夕食会を開き、JICA フィリピン事務所職員及び、PAJAFA のメンバーと食事をとりながら意見交換会を行った。

参加者がPAJAFAのメンバーとJICAの関係者で、本日初対面になる青年がほとんどであったが、非常に打ち解けた雰囲気の中、食事をとりながら歓談やパフォーマンスの交換が行なわれ、日常の生活など職場訪問では聴き取りが難しい事なども話し合われた。

5. 所感及び提言

(1) 調査団所感

予想以上のフィリピン側の協力で有益な調査が出来た。彼らのホスピタリティーを肌で感じる事が出来た。ただ、マニラ近郊からの青年は女性が多く、男性の来日青年は少ないが、今回の訪問で事前に連絡を入れたり、電話で都合を聞いたりしてみたが、残念ながら交流出来たのは皆女性であった。職場を訪問した際に、目に入るスタッフは多くが女性で、女性の社会進出は非常に進んでいるようであった。大統領選挙の年でもあり、帰国青年のなかには、日本では「県・市議会の議員」のような選挙に立候補を予定する者もいた。

フィリピン外務省やPAJAFAとの懇談、職場訪問は、都内･地方プログラム担当者として、非常に有意義な訪問と思われるが、合宿セミナーに参加された人は、再交流を第一としている。又、各訪問先に調査チームの目的、メンバーの構成などを事前に連絡していただいてはいるが、十分な調査をする時間が足りなかったり、送り出す側からの話

を聞くことが出来なかったりしたこともあった。従って調査団を派遣するにあたっては、様々な面を再考する必要もあると思う。

最後に、我々調査団のためにアポイント、車などの手配をしていただいたJICAフィリピン事務所、職場訪問を快く受け入れていただいた青年及び職場、忙しい中都合を付けて再交流にかけつけていただいた帰国青年、PAJAFA-21で活躍されている役員の方々など、アフターケア調査チームに関係していただいた皆様に感謝申し上げます。

(2) 団員所感

イ．帰国青年の活躍する姿とフィリピンの様子　　来島　誠哉

今回の職場訪問はすべて女性の帰国青年の職場であった。

どこのオフィスもパソコンが導入されており、整然としているところばかりである。彼女達は管理職若しくは専門職的立場にあり、いずれも責任の重いポストに就いていた。私たちがオフィスに入って最初に見たものは、厳しい表情で仕事をする彼女たちの姿であった。

私たちの存在に気がつくと一気に表情を崩し、Hi Seiya-san…という感じであったが、彼女たちの日常の一面、いわゆるキャリア・ウーマンの一面を垣間見ることができた。

彼女たちからどんな仕事をしているかについての説明を受けた後、青年招へい事業についての意見交換を行った。さすがに、30日間職場を空けることについては問題があったらしいが、周囲の応援も得て、貴重な体験をすることができたと話してくれた。日本滞在中、私たちが「何でそんなにたくさんのおみやげを買うの？」と彼女たちに聞いたことがあったが、何となく理由が分かった。やはり、周囲に負担をかけているので申し訳ないという気持ちが彼女たちにはあったのであろう……。

さて、彼女たちのオフィスで感じたこと、スタッフの大多数が女性なのである。みんなスーツをビシッと着込み、知的な表情、スラリとした人が多く、まさしくそれは我が国で言うところの「テレビドラマのキャリアウーマン」といった感じなのである。彼女たちキャリアウーマンに対するフィリピノ・ビジネスマンは何処に…？という疑問が生じた。彼女たちが言うには、民間企業には結構男性が多いとのこと。それにしても職場における女性の姿の多さが「女性の社会進出」のバロメーターであるならばフィリピンはまさに女性の社会進出が進んでいると言えるであろう。

彼女たちの中には、結婚して子供もいる人もおり、小さな子供はどうしているのかとたずねたところ、メイドさんを雇ったり、親戚の人に頼んだりしているとのことであった。

我が国でも盛んに「働く女性のための社会環境の整備」が論議こそされてはいる。し

かし、なかなか改善されていないのが実態である。国家や地方自治体、そして民間企業が保育施設などを充実させることは現在の経済状態では無理なのかも知れない。また、今の我が国で諸外国のようなメイドさんというシステムは人件費などを考えても馴染まないと思う。

さらに、日本社会において女性が活躍できない理由のひとつに「仕事の進め方」があると思う。「根回し」「付き合い」が重要であり「酒を飲みながらの話し合い」などは女性にとって不利な条件の最たるものかも知れない。各人が自分のすべてを犠牲にして、企業のために尽くしてきたからこそ今の日本社会があるというのは否定できないが、女性の社会進出をさらに推進させようとするならば、社会環境はもとより、仕事の進め方の改善も必要である。また、フィリピンでは残業というものがほとんどないそうである。ただ、彼女たちに限って言えば日本のビジネスマン顔負けの労働時間であったが。

自らの健康も、また、家庭を省みることなく、ひたすら働くというのが美徳であり、かつ勤勉であるとしてきた日本、価値観の多様化で変わりつつあるというものの、この傾向はしばらくは続くことであろう。

民間、公務員社会を問わず、仕事のやり方を見直すことなく、人員の削減ばかりを優先させていたのでは、そのうち日本そのものが大きな暗礁に乗り上げてしまいそうな気がしてならない。

フィリピンではマニラ周辺の鉄道網の整備、高速道路の整備が日本の援助で行われている。しかし、やはり自助努力をしなくしては国家の発展は期待できないのではと思う。国民の意識の変革が大きな変貌を遂げるためには必要だと感じた。

彼女たちは、最高の教育を受けたフィリピンをリードしていく人たちである。今後も彼女たちの活躍を心から応援したいと思う。

彼女たちをサポートするにはあまりにも存在の小さな自分であるが…

彼女たちから見た日本

彼女たちが日本に来て感じたことは、日本人は優しいkind規律正しいdiscipline勤勉hardworking街がきれいclean-town etc…概ね高い評価である。また、国内に政治不安や紛争などがないため、すこぶる平和な印象も受けることであろう。さらに、交通機関の発達、特に電車の便利さには驚いているようであった。マニラの渋滞の中、移動手段が車しかないというのは本当にたいへんなことだと思う。

合宿セミナーでは、同世代の日本人と話すことができてとてもよかったという意見がほとんどであった。そんな日本の印象の中に「働き過ぎ」「物価が高い」という話に混じって「日本人は自分の意見を話さない」というものがあった。彼女たちがなぜそ

んなことになるのかと質問してきたため、我々なりに考えられる理由を回答した。

私たちは「教育システム」「無関心が無難」「新しいことを好まない」などがその理由のひとつではなかろうかと説明した。また、語学力については各人がそれぞれのものを有しているはずであり、もし自分の意見を話せないとか相手とうまくコミュニケーションが図れないというのであれば、その原因は語学力だけではなく、日本語力、自己表現力の欠如も考えられると説明した。純粋に自分の気持ちを相手に伝えようという熱意さえあれば、語学力を超越して何とかなると私は信じている。

ディスカッションのとき、自分の意見を発表したところ「それはあなた自身の(極端過ぎる)考えで、大多数の日本人はそんな風には考えていませんよ。外国青年に誤解を与えることになります……」と叱責されたことがある。それならば、あなたはどう考えているのですか？とお願いすると沈黙されてしまった。場が和んでくるといろいろな意見が出てくる。…私の職場は忙しい、とてもたいへんだ…面白くない…女性の登用が進んでいない、女性は不利である…旧態依然としている…etc…不平不満は言うけれども、現状打破のための(オリジナルな)方策、将来あるべきビジョンというものは　持ち合わせていない。来日する青年は高度な教育を受け、各職場でリーダーシップをとっている方が多く、日本側カウンターパートのそんな姿、実態に多少物足りなさを感じているかも知れない。

胸中に考えを有しながらも発言するエネルギーが欠如している私たち。問題を提起して面倒なことになるよりは現状を耐え忍んだ方が得策というスタンスをとり続ける私たち。こんな私たちが彼女たちにはどのように映ったことであろう？ディスカッションにおける彼女たちの発言力には驚くばかりであった。

発展を続けるフィリピン、その原動力となる彼女たちのパワーに負けないよう、私もより良い社会環境をつくるべく努力を続けていきたいと思う。

友情は続くのであろうか？

過去に何度か合宿セミナーに参加した私はGreeting-letter/cardを毎年多数送っている。しかし、返事ははとんど来ない。1割も来ない。勿論、数の問題ではないのだが、とにかく返事はこない。ホームステイ先のホストファミリーとのみ連絡をとっているのだろうかと帰国青年に訊ねたところ、何人かではあるがホストファミリーとも連絡をとっていないとのことであった。

さて、今回、フィリピンでPAJAFA(同窓会)の存在とその活動、活躍を知ることができた。正直のところ、驚きの連続だった。彼女たち(実際の活動の中心ははとんどが女性)との意見交換の時間に、彼女たちが日本滞在中で得た知識をフィリピンで活かしているという話しを聞くこともできた。日本のノウハウをそのままそっくり導入

したというのである。日本でもPAJAFA同様の組織をつくってはどうかとの示唆もあった。

日本でも合宿セミナー参加者がホームページを作成してくれて、誰でもアクセス可能な意見交換の場を設けてくれた。また、合宿セミナー参加者数人で集まり、軽く飲みながらの情報交換会(小同窓会？)も行っており、貴重な時間、楽しいひとときを得ている。そのときに撮影した写真を帰国した青年に送ったりもしている。

職場以外の人との交流は本当に新鮮で、パワーも得られる。ただ、みんな忙しい毎日であるため、日程の調整がつかないのも事実である。

Madeleineさん(Livelihood Corporation)が「私たちが将来、日本へいくことは難しいです。それでも、もし、私たちの子供が日本へ行くようなことがあったならばサポートしてください。」と話してくれた。口約束で終わらないように、しっかりとサポートできるような経済力を付けなくては…いやいやその前に、彼女たちとの友情が断ち切れることのないように頑張らなくては！

世間に蔓延する「無関心」という大きな流れに逆行し「国際交流大好き、人間大好き」で精力的に生きていくと、時として周囲の理解を得られず、ほんの少しだが寂しい思いをすることがある。それでも今後また、機会に恵まれたならば、青年招へい事業には喜んで参加させていただきたいので、よろしくお願い申し上げます。

ロ．フィリピン訪問所感　　内田　雅幸

平成9年度青年招へい事業地方プログラムの関係者として、アフターケア調査団に参加した。以下気がついたまま述べさせていただく。

1．フィリピン交通事情

フィリピンは日本車が多かった。中でも興味を引いたのが、日本から直輸入したバスが多かったことである。フィリピンではアメリカなどと同様、車が右側通行なので、ハンドルは左側についている。日本で走っているバスは右ハンドルなので、フィリピンで走るにあたり、まずこのハンドルを左側に付け替えなければならない。そして、左側にある入り口をふさぎ、右側に作らなければならない。以上のような改造はどうしても必要である。しかし、日本でのそのままで走っている。東京都内を走るバスそのままのもの、ワンマンと書いてあるもの、行き先が日本語のまま走っているもの、一日見ていても飽きなかった。また個人タクシーならぬ個人バスがあるらしいのはおもしろい。

乗用車については、まず走っている車の状態がばらばらであるということに興味があった。フィリピンではベンツを乗っている人もいれば、ドアがなくてもへいき

で乗っている人、タイヤがつるつるでも乗り続けている人もいる。

次にジプニーに触れてみる。エンジンは日本のいすずのものを積んでいるらしいが、これはもともと戦争終了後アメリカ軍が置いていった物を改造したのが始まりらしい。ほとんどがクーラーがついていないが、タクシー的な便利さとバス的な低料金が大きな魅力である。経路が決まっているらしいが、その目的地が町名などで書いてあり、旅行者が乗るのは非常に難しい。

ガソリンは安い、1リットル10ペソ程度だから、日本円で33円程度。また、高速道路いわゆる有料道路料金も安い。時速100キロメートル以上で1時間以上も走って請求された金額が11ペソ、約40円くらい。ただし、車そのものの価格は高い。例えば7年過ぎた日産サニーがhalf million pesoだと言っていたので、約150万円。なんと高価なのか。メトロマニラでは鉄道網が発達していないことから、たとえどんな車でも、少なくとも1台は所有せざるを得ないようである。

2．フィリピン生活事情

①フィリピンの「ある」生活様式（パート1）

自分自身の今回の目的の一つに、フィリピンの貧困の様子を見てみたいという事があった。考え方によってはたいへん失礼なことである。city tourで案内してくれた方は、自分たちの国のよい部分だけを見てほしいと思っていたに違いない。誰でもが恥部は見せたがらないから。しかし。あえてスモーキーマウンテンとスラム街見学をお願いしたことは、「現実」をきちんと見たいと考えたからである。

スモーキーマウンテンは、メトロマニラ・トンド地区にあり、高さ10メートル程度の、まさにごみの山であった。時折いまでも煙が立ち上がっている。治安が悪い地域だそうで、昼間も犯罪が多く発生するらしい。それでも昔に比較して見違えるようにきれいになっているそうである。

スモーキーマウンテンの回りもスラム街となっているが、スラムはここだけではなく、様々なところに存在している。誰かが違法に住居をかまえると、やがてそれがスラム街に発展していく。住んでいる場所はまちまちで、例えば、橋を占拠して住む人、路線のすぐ横に住む人、彼らはしたたかに密集していく。

どんな人が住んでいるのかというと、地方出身者が不法住民になるパターンがあるとのこと。田舎には思うような仕事がないから、土地など財産をすべて売り払って上京してくる。しかし、現実はあまくなく、結果的に思うような職に就けず、そのうちに金が底をつき、そのまま不法住民となるケースである。

驚くことは、こんな状態でも、家賃があるということだ。その「しま」を扱う

やくざのような人がいて、生活を守ってもらうことを条件に金銭を要求している。どこでも商売が成り立つものだと感心した。

当局は、他人の土地を占拠して住んでいるこの行為に対して、あまり強い指導をしていない。予算がないこともあげられるとは思うが、何よりも政治家が選挙の票欲しさに強い指導をしていないとのことである。改善するには時間がかかりそうだ。

②フィリピンの「ある」生活様式（パート２）

初日にいきなり、空港からホテルに行く道でストリート・チルドレンに出会った。私たちの乗っていた車に近づき、窓をたたき、手を口に入れるまねをして食べ物を要求していた。この時来たのは２人の子供だったが、それぞれ10歳程度、一人は女の子で上半身裸の小さな子供を抱えていた。その後何回も彼らのようなストリート・チルドレンに遭遇したが、どの車の運転手もまるで相手にしていない様子で、車の鍵をしめたままであった。

大人の場合は自分の努力で多少の改善が可能かもしれないが、子供の場合はそうは行かない。親の勝手な都合で捨てられた子供達が、住む家もなく生きていくことは並大抵のことではない。通常であれば未来ある子供達は大きな夢を語れる存在であるが、ここではそうではない。ここには非常に悲しい現実があった。「彼らは将来どういう大人になるのだろうか」ときくと、それに対する回答はやはり「学校も行っていないし、まともな就職はできないであろう。すべてが悪循環の人生で、それこそ泥棒をはじめとして各種の犯罪に関係するようになってしまうのではないか。」と言っていた。悲しい。早く改善されることを祈る次第である。

③フィリピン人の生き方に乾杯

最近、文庫本でアジアの旅行記が多く出版されていて、アジアが改めて紹介される機会が多くなっている。それらを読むと、アジアにはパワーを感じるという記載がある。

今回会ったフィリピンの女性は様々な競争を勝ち抜き、現在の地位を築いているいわゆるエリートである。しかし彼らはそんな学歴をひけらかす風でもなく、国を背負って立っているという感覚で働いている。また、日本に住むフィリピン女性は、持ち前の明るさを武器に頑張っている。彼らを比較すると、全然別の次元でありながら、いずれも「強く生きている」という言葉で言い表せるのではないだろうか。はたして、自分が彼らと同じそれぞれの状況におかれて同一の行動がとれるだろうか。否である。金があろうがなかろうが、生きていこう、何かを

やり遂げようとする彼らのバイタリティーに私は敬服する。私は今回のフィリピン行きをまとめる言葉として、「フィリピンの人々にはパワーが満ちあふれている」とまとめたい。

4．日本に帰国して

初日に、いきなり空港からの道でストリート・チルドレンに遭遇したと書いたが、彼らの生活と日本の子どもたちの生活とを比較して考えた。

日本の同世代の子どもは誕生日にケーキを買ってもらっても喜ばない。部屋に入ればおもちゃが山ほどある。あまりにかけ離れた生活である。どちらも現実ではある。しかし、これらの違いをどう表現したらいいのか、私には分からない。

ただ私は、日本の子どもたち物質的には何の不足もなく育っている子どもたちにあの様子を見てもらいたい。見て自分の生活と比較してほしいと思う。

ハ．つれづれなるままに……フィリピンの一考察　　柳澤　文彦

従前より趣味がスキューバダイビングである私は、既にフィリピンを数回訪れている。しかし、それらの観光地はリゾートであって、「本物のフィリピン」ではない。それらはどちらかというと日本などの外資により作られたものであり、フィリピンは政策として観光に力を入れているが、今回のアフターケア調査チーム派遣は行き先がメトロマニラ周辺であること、アポイント関係者は国の中枢や国連関係者もいることから、中央政策的部分について少し本物のフィリピンに、フィリピンが今何を考えているのかに近づけるかもしれない、そう思って日本を旅立った。

今回、以前のプログラムに参加したフィリピン人達を訪ねて、彼らはとてもいきいきと仕事をしているのが印象に残った。確かにフィリピンではスーパーエリートではあるし、自分がやりたいことを実現できたというのもあるだろう。しかし、これら参加者の誰と話しても、根底に「フィリピンの将来を考える」ということが確実にあると感じられた。フィリピンではPAJAFA-21という帰国青年の同窓会が活発に機能している。彼らにすれば国に推薦されて、皆が憧れる日本へ招待されて行ったのだという自負心もそれだけにあるだろうが、活動の内容は、日本で考えるその手の同窓会を考えると特筆に値するものである。ボランティア活動や、ASEANの他国の同窓会と連絡をとりあい、相互交流や派遣も行っている。PAJAFA-21の幹部もそれぞれが活発であり、参画意識を十分持っていると感じた。これに比して日本はというとそういうものは聞いたことがないし、一部の「活動家」が頑張っているに過ぎない。ほとんどの参加者は合宿セミナー後などでもそのままであり、集まりを呼びかけても出席するほうが圧倒的に少ない。

PAJAFA-21は、JICAの肝入りで作ったということであるが、なぜ主催国である日本にこのようなものがないのか、改めて疑問に思った。PAJAFA-21の活動は広報用のパンフレットも作っているほどであり、研修で培った意識を後々に継続させるという意味で、非常に感銘を受けた。

フィリピンでそれぞれの立場で活躍している参加者と話すと、個人主義が日本よりも徹底している感がある。もちろん組織人として組織が目指すものについての考え方もしっかりしているが、個人として捉えると、実力主義が日本よりも重視されており、だからこそ個々のキャリアを磨くことに日本人より厳しい部分があると感じた。今後彼らに求められるのは更なる現実の把握であろう。国民の生活水準に相当な格差が存在していることを内外から言われてはいるものの、実際話してみると、「生きている世界が違う」というようなあきらめ的な発言が少々気になった。

最後に、昨今の日本の、世代にかかわらない倫理の欠如を見たとき、人間の生きざまは学歴や経済や政治・行政システムだけではないと感じる。人と人とのつながり、社会的見地での倫理観、そして国民の社会や国家への関わり、そういうものを振り返るときが来たようだ。私は学生時代よりアジア各国はほとんど行ったが、行くたびに日本という国はちょっと歯車がずれてきていると感じる。受け入れだけでなく、日本人をASEAN諸国に派遣したほうが良いのではないかと思う。

ニ．アフターケア調査チーム　イン　フィリピン　　曲木　俊博

フィリピンを訪問して

フィリピンを訪問するのは1986年1月に訪れて以来となり、当時の様子を記憶から探し出すことはガイドブックを読んでも難しく、期待と不安の混じる訪問であった。東南アジアにおける交通渋滞はここマニラでも例外ではない。今回訪問した各職場や関係者には、このような道路交通に関する立場の青年がいないので、現状を把握する事はむずかしいが、彼らの社会においてはまだ他にやらなくてはいけない事が多くあり時が経つのを見守るのが一番と考えている様に思える。

都内プログラムを担当する私にとってフィリピン側の窓口である外務省を訪問し担当官と話し会う機会を得た事と、フィリピンの現状を実際に自身の目で見・肌で感じる事により今後のプログラム作成に関し大きなヒントを得ることが出来た。

フィリピンでは「バハラナ」・タイでは「マイペンライ」の一言で『仕方がないさ』と片付けてしまうが、「バハラナ」は陽気に聞こえ彼らの気質がわかるような言葉である。都内プログラム中でも彼らのコンディションを見分ける事は、比較的容易に判断できるし、その場を盛り上げようとする気質は他のアセアンの人々からは真似の出来るものではない。そんなフィリピンにアフターケア調査チームとして訪問し

たことは目的の一つでもある「再交流」をするにはもってこいであった。

アフターケア調査チーム

4人の抜群なチームワークと、現地JICA事務所・帰国青年の温かいホスピタリティーのおかげで予定された日程は全て消化できた。

職場訪問は、平成9年度に来日した青年を対象に選んでいただいた。合宿セミナーに参加したメンバーとの再交流を目的としたこともあるが、プログラムの内容などに関し、評価会での感想と、ある程度時間が過ぎてからの感想の違いや、問題点などを十二分に理解できるのは、実施したプログラムの参加青年(日本青年も同様)がベストだと考えたからだ。別な見方もあるかと思うが、今回のアフターケア調査チームは結果的に調査・再交流共に有意義な日程であったと思う。反面、地方の青年と交流が出来なかったのは、日程の都合とはいえ非常に残念だった。

マニラ国際空港に降り立った時以後の記憶が、今でも鮮明に残っている。何故か脳裏に映像として、今でも思い浮かべることができる。「青年招へい事業」で来日する青年も同様に帰国後も出来る限り長く、日本での研修成果、印象を残してもらうために、メインのプログラムである合宿セミナーや、ホームステイを含めプログラム全体の実施方法を今一度考えさせられると共に、心温まる接遇がいかに大事であるか再確認させられた。

タ　イ

平成9年12月17日～12月26日

社団法人 青年海外協力協会

たことは目的の一つでもある「再交流」をするにはもってこいであった。

アフターケア調査チーム

4人の抜群なチームワークと、現地JICA事務所・帰国青年の温かいホスピタリティーのおかげで予定された日程は全て消化できた。

職場訪問は、平成9年度に来日した青年を対象に選んでいただいた。合宿セミナーに参加したメンバーとの再交流を目的としたこともあるが、プログラムの内容などに関し、評価会での感想と、ある程度時間が過ぎてからの感想の違いや、問題点などを十二分に理解できるのは、実施したプログラムの参加青年(日本青年も同様)がベストだと考えたからだ。別な見方もあるかと思うが、今回のアフターケア調査チームは結果的に調査・再交流共に有意義な日程であったと思う。反面、地方の青年と交流が出来なかったのは、日程の都合とはいえ非常に残念だった。

マニラ国際空港に降り立った時以後の記憶が、今でも鮮明に残っている。何故か脳裏に映像として、今でも思い浮かべることができる。「青年招へい事業」で来日する青年も同様に帰国後も出来る限り長く、日本での研修成果、印象を残してもらうために、メインのプログラムである合宿セミナーや、ホームステイを含めプログラム全体の実施方法を今一度考えさせられると共に、心温まる接遇がいかに大事であるか再確認させられた。

タ　イ

平成9年12月17日～12月26日

社団法人 青年海外協力協会

I. 調査目的

1. 調査目的

・帰国青年の職場を訪問し、日本での研修成果のフォローアップを行うとともに、本事業の理解、日本理解の増進を図る。

・関係者との意見交換やタイ国事情の理解を通じ、今後のプログラム改善に寄与する。

・ホームステイを通し、タイ国の生活習慣・食生活を体験することによって、より深く相手国を理解するとともに、ホストファミリーをはじめとするタイ国の人々との友情を深める。

・帰国青年との再交流を通して、日本への関心を喚起するとともに、永続的な相互交流のあり方について模索する。

2. 調査内容

(1) 国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency : JICA) タイ事務所訪問

・青年招へい事業運営状況とタイ国における JICA 事業の概要

(2) 在タイ日本大使館表敬訪問

・タイ国の一般事情および青年招へい事業への関与

(3) 国立青年局 (National Youth Bureau : NYB) 表敬訪問

・青年招へい事業運営状況

・プログラム内容などに関する意見および要望事項

・今後の事業のあり方について意見交換

(4) 同窓会 (Friendship Youth Alumni Association : FYAA) との意見交換会

・活動内容および活動上の問題点

・今後の活動の上での JICA や日本側関係者に対する要望

・プログラムに関する意見、要望事項

(5) 帰国青年活動現場訪問

・日本における研修成果、日本滞在経験の成果

(6) ホームステイ

・タイ国の一般的な生活、タイ国の人々についての理解

3. 調査団員

	氏　名	所　　属　　先	青年招へいとの関わり
リーダー	荻野　美佐子	富士原病院	分野別地方プログラム ホストファミリー
メンバー	深田　いづみ	三丹住宅機器販売	分野別地方プログラム ホストファミリー
メンバー	麻生　祐子	福知山市立上六部小学校	分野別地方プログラム ホストファミリー
メンバー	藤田　昌己	龍谷大学	分野別地方プログラム ホストファミリー
メンバー	須田　美樹	社団法人青年海外協力協会	分野別都内プログラム 担当者

II. 調査結果

1. 日程

12月17日(水)

14:25　関西国際空港発(NH151)

18:35　バンコクドンムアン空港着

20:00　デルタグランドパシフィックホテル　チェックイン

20:30　JICA主催夕食会

12月18日(木)

09:30　ホテル出発

10:00　JICAタイ事務所表敬訪問

10:30　在タイ日本大使館表敬訪問

12:00　昼食

14:00　国立青年局(NYB)表敬訪問(～16:00)

17:00　ホテル帰館

12月19日(金)

09:00　ホテル出発

10:00　帰国青年活動現場視察(Klong Klum School)

15:00　学校発

16:30　ホテル帰館

12月20日(土)

09:00　ホテルチェックアウト

ホストファミリーと対面

ホームステイ開始

12月21日(日)

終 日　ホームステイ

12月22日(月)

正 午　ホームステイ戻り

デルタグランドパシフィックホテル　チェックイン

12月23日(火)

09:00　同窓会との意見交換会(～11:00)

12:00　ホテル出発

14:00　帰国青年活動現場視察(Faculty of Environment Resource Mahidon University)

17:00　ホテル帰館

12月24日(水)

08:00　ホテル出発

10:00　Samutsakhon Provincial Agricultural Office 訪問

11:00　帰国青年活動現場視察(Samutsakhon Group of Agriculture Youth)

12月25日(木)

終 日　報告書作成及び帰国準備

19:00　調査団主催夕食会

12月26日(金)

05:30　ホテル出発

09:10　バンコクドンムアン空港発(JL728)

16:10　関西国際空港着

2. 主要面談者

(1) JICA タイ事務所

鷲見　佳高　次長

大川　直人　所員

(2) 在タイ日本大使館

木暮　康二　一等書記官

(3) 国立青年局 (National Youth Bureau)

Deputy	Ms. Sienoi Kashemsanta Na Ayuthaya	
Director of External Relations Division	Ms. Usanee kangwanjit	
Chief of External Relations Division	Mr. Sathit Apaiyaroj	(他3名)

(4) 同窓会 (Friendship Youth Association of Thailand)

President	Mr. Decha Sigvanich	(1991 年産業青年)
Manager	Ms. Muukda Jenthanyawan	(1984 年科学技術)
	Mr. Pramote Chaowtai	(1989 年農業)
	Ms. Jaruporn Sittinuncharoen	(1997 年教育)
	Ms. Kobkaew Wimanchun	(1997 年教育)
	Ms. Jitjanya Permpatr	

(5) 帰国青年活動現場

イ. Klong Klum school	Director	Ms. Supratara Nakvanich
	Teacher	Ms. Busagon Raruenrom
		(1997 年度教育)
ロ. Samutsakhon Provincial Agricultural Office		
	Chief	Ms. Prapai Chaichana
ハ. Group of Agriculture Youth		Mr. Sakchai Kitchai
		(1997 年度農業)

3. 調査結果概要

(1) 青年招へい事業の成果を確認

・帰国青年の中には日本での研修について論文を書いて発表したり、撮影したビデオをテレビで放映したりしている者もいる。タイ国内において波及効果があることでもあ

り、大きな研修成果といえるであろう。

・多くの帰国青年が遠方より会いに来てくれた。また、日本で面識のなかった帰国青年にも本事業に係わった者ということで大変お世話になった。本事業での滞日経験が青年と日本人との友好的な関係を構築するうえで大きな影響を与えたことは間違いない。

(2) プログラム作成・実施上の留意点の確認

・短い時間であるが帰国青年の職場を訪問し、タイの現場(教育、農業)を視察することができ、プログラム作成上参考となった。

・タイを訪れ、青年と同じような立場におかれることで、ささいなことがストレスになることなどを体験でき、受入側としての留意点を確認できた。

(3) 同窓会活動についての理解

・同窓会の活動について知ることができ、帰国青年と日本側関係者の永続的な交流のあり方について考える機会を得た。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容

イ. JICA タイ事務所

タイにおける JICA の事業概要について説明いただいた。

・事業の現状として、①長期専門家受入②プロジェクト方式技術協力③開発調査④専門家チーム派遣⑤研修員(含む青年招へい)⑥第三国集団研修⑦協力隊⑧シニア海外ボランティア⑨開発投融資、がある。

・1996 年 1 月に実施された「対タイ経済協力総合調査」に基づき、タイ日双方は、以下の 5 分野を今後の対タイ援助の重点分野とする方針である。

①社会的セクター(教育、エイズ、WID 等)

②環境保全

③地方開発(地方都市インフラ整備、農業振興、農村開発)

④経済インフラ整備と人材育成

⑤地域協力支援(インドシナ地域を中心とした周辺国の開発支援、地域間相互協力)

これら重点分野は、タイの抱える問題を反映している。今後、青年招へい事業においてもこのような重点分野に注目し、同事業の分野や人選に反映できれば、タイ青年にとってより有益なプログラムを作れるのではないか。

・青年招へい事業については、JICA の技術協力事業のなかで交流の要素も含んでい

るユニークな事業である。タイ側窓口機関についても、他の事業に関しては技術協力局であるのに対し、青年招へい事業は国立青年局である。1998年は第三フェーズの最終年にあたり、今後の同事業のあり方について検討している。

ロ．在タイ日本大使館

木暮一等書記官より、タイの事情全般についてお話しをうかがった。

① タイの経済について

タイ経済は、1989年から経済が本格的に伸び始めた。90年代の成長の過程で、外国へ市場を大きく開放した結果、外資が流入し、それが不動産価格の上昇等を招いた。しかし、3年程前から変調をきたし、97年7月のタイバーツの変動相場制への移行後、それが著しくなった。日本にとっても、タイは大きな市場であるので、その経済の落ち込みは日本にも大きな影響を与える。しかし、タイには、まだ、経済成長の余力があると考えられている。

② 教育について

・タイは日本より学歴社会である。大学が少ないため、大学進学率は全体の5～6％である。
・理工系が少ないことが、経済成長のネックである。
・大卒は企業でもたいへん優遇され、初任給は破格であったりする。
・タイの義務教育は小学6年間であるが、それを中学3年まで延長しようという動きがある。
・タイの子供たちは、親のためなら何でもするという考えがあって、小さい頃からよく働く。親にとっても、子供は労働力になっている。
・教育レベルの引き上げが今後の課題となっていくのであろう。
・日本も、技術教育の面から協力し、タイの中でいろいろ開発できるようになっていけばよいだろう。

③ その他

・青年海外協力隊活動現場への視察の機会があり、JICAと積極的に連携をとっているという印象をもった。
・エイズの問題については政府でも手をうっているので数の伸びはないが、言葉が通じない山岳民族へどうアプローチしていくかが大きな問題である。また、エイズは根底に根強い貧困があるためで、課題は多い。

ハ．国立青年局(NYB)

① 青年招へい事業運営状況

来日青年の選抜方法について分野ごとに各関係省庁に任せている。例えば教育グループであれば、文部省、大学省が募集・書類選考・面接などを行い選抜してくるそうだ。NYBは直接人選に係わっていないが、バンコクだけでなく地方からの参加者を多くしていきたいとのことであった。

② 帰国青年に行ったアンケートをもとにした青年招へい事業に対する要望

概ね有意義なプログラムであるという評価をいただいた。改善希望は以下の通り

・来日前にもっと情報がほしい(合宿討論テーマ、スケジュールなど)。
・移動に時間がかかりすぎる。
・講義より施設見学を多くしてほしい。
・講義の質問時間を長くしてほしい。
・来日前にもっと情報がほしい

③ 今後の事業のあり方について

・分野別研修内容の充実のために分野をより具体的にしてはどうかなど提案してみたが、NYB側の反応は鈍く、「この事業はFriendship Programである。研修内容は日本側に任せる。グループに25名いれば25名全員の要望をかなえることはできないのだから」という回答であった。研修内容の充実についてはあまり関心がないようであり、研修色を強めるというJICAの方向とのギャップを感じた。

ニ．同窓会との意見交換会

同窓会の活動を中心に意見交換を行った。

① 同窓会の活動内容

[国内] ・3カ月に1回の委員会、年に1回の総会開催
・渡日前のタイ青年に対するオリエンテーション
・帰国青年の活動現場の訪問
・チャリティー活動

[国外] ・AJAFA会議への出席
・国際青年キャンプへの参加
・交流プログラムの実施

1998年3月、AJAFA会議はタイのチェンマイで開催される。同窓会はホストとして準備を進めていた。会議と併せて国際青年キャンプも開かれ、ASEAN各国か

らそれぞれ8名が参加する。日本からも参加してもらいたいがどこに参加の依頼をすればいいかと聞かれた。とりあえずJICAに依頼をしては、と回答した。

開催費用についてはJICAからのサポートと帰国青年の勤務している会社などを中心にスポンサーを募ってまかなっている。スタッフは帰国青年が仕事の合間をぬって交代で担当する。

同窓会としては将来的に日本との交流活動を行いたいが、そういった場合日本のどこにコンタクトをとればいいのか分からないとのことであった。

② プログラムについて

滞日経験は帰国青年にとって貴重な体験になっており、帰国後も日本との交流を望んでいる。要望としては以下のことが挙げられた。

・日本語のカセットの送付が遅い。
・スケジュールなど情報が早くほしい。
・共通プログラム中の講義の中には、タイでの講義と重複するものがある。講義の代わりに日本語を勉強したい。
・日本でのタブーを自分がしていたら言ってほしい(ホームステイなどで)。

③ その他

・同窓会活動は、仕事をもった会員がボランティアで行っている活動なので、限界はあるだろう。だが、意見交換会に集まった人たちは活動に大変熱心である。英語の堪能な方を秘書に迎えるなど組織強化を図っているようであった。
・国立青年局とは特に連携をとっていないが、JICAからは資金面サポートなどを受けている。

(2) 帰国青年活動状況

イ. 訪問先：Klong Klum School

バンコク市立の同校は、幼稚園、小・中学校が併設された大規模校である。その現状や教育内容について、学校長であるMs. Supratara Nakvanichより説明を受ける。それによると、バンコク市内には、小学校が429校、中学校が40校あり、それぞれは、文部省に属するか、バンコク市に属するかに分かれている。バンコク市に属する学校について文部省が管理するのは教育課程のみである。ただ、文部省からの視察はあり、正しく円滑に教育活動がなされているか、調査はあるということだ。

この学校は、今年度から中学校が併設されることとなり、今その工事が行われている最中である。教室棟、図書館のある教室棟、食堂と幼稚園の棟、ラマ9世即位50周

年記念図書館のある同校は、1200人の児童に対し50人の教師がおり、豊かな学校というイメージが強い。

中学校が新しく義務教育となり、職業訓練の科目があることに興味を覚えた。個性を生かし、将来への展望を持つ授業だと感じる。10～20年前に全員必修となったボーイ・ガールスカウトについても、日本が学ぶべきことといえる。

他に必修科目として、伝統舞踊や伝統的な飾り細工、お菓子作りがある。伝統工芸やお菓子作りの講師として、保護者の中でその仕事をしている人や、得意としている人が当たる。保護者と学校が一体となった教育の姿の一面を見た。こういった、伝統を重んじ後世に伝えていこうとする姿勢は、現代日本の中に薄れつつあるものだ。自国を愛し、他国にも目を向けようとするなら、古きものから学ぶ姿勢も大切であると考える。帰国青年がこの舞踊を専門に教える教師であったこともあり、昼食時に、代表の子供たちが披露してくれた。小学2年、4年の子供たちであったが、発展段階に応じた理解をもって踊っているように感じられた。着付けや化粧も重要な伝統の一つだと思うが、これも保護者が手伝うという。日本からの訪問者のため特別な練習を、この日のためにおこなったのであろうが、子供達は日本に対して身近な思いを抱いたであろうか。私たちが訪れたことによって子供達は刺激になったと思う。

中学1年生と小学3年、4年生のクラスを参観した。どのクラスも礼儀正しく私たちを迎えてくれる。それぞれ教師に対しても礼儀正しい様子は同じで、目上の者に対しての礼節を重んじる教育が行き届いていることに驚く。日本の算数や図工に当たる授業、タイ語の授業などを参観した。図工では家で不要になった広告の紙や、自然のバナナの葉を利用した工作が行われていた。社会科では国内外に視野を広げるべく、グループでの調査学習をしていた。理科ではグループ毎の実験結果を代表が発表していた。授業を行う形態も工夫され、クラスの雰囲気もよい。各教室の掲示物も丁寧かつ美しくされており、子どもたちの意欲づけにも効果的と思われる。教師の意識の高さに感銘を受ける。また、社会科において、小学校1年生から自国の歴史を簡単だが習うという。自国を愛し、誇りを持つためだと教師は語った。

学校長に当校で教育上大切にしていることはなにかと問うと、次の答えが返ってきた。

①子どもの責任感

②規律

③教師の適切な考え方

この3点を中心に据え、日々の教育活動を行っているとのことだ。各クラスを参観したり、下校の様子を見たり、一日の学校の様子を見る中で、これらについてうなずけることが多かった。

この3つに加え、政府から強調して教育内容に加えるよう要請されていることは、

①環境保護

②節約

この2点である。世界的問題となっている環境保護については、義務教育のうちから位置づけ、子どもたちへの意識に働きかけることは重要である。日本でも近頃力を入れるようになった環境教育と類似している。節約については、環境問題につながることでもあり、また、経済状態の不安定な現在、立て直しのための一つの取り組みとも言えるのではないか。タイでは子どもだからと甘やかされることはなく、一人の国民として厳しく育てられているという感を抱いた。

中学校での問題として、麻薬、エイズが挙げられる。政府のキャンペーンは今年度から始まり、学校から派遣されて研修することも始められた。教師や学生が派遣され、学んだことを校内に広めるということだ。

日本では社会問題になっている、いじめについては、ないとは言えないが、教師と子どもとがしっかりつながっているから、それ程激しくはないとのことだ。「教師や親の教えを守って生きているのが、タイの子どもである。特に小学校段階では、教師は教えに背くことは少ない。そのため、いじめや自殺は起こりにくい。」そう説明する校長の顔は自信に満ちていた。教師の影響力は大きいと言うことで、その人材採用については、日本同様厳しく、幾つかの試験を課せられるということだ。教育の担う責任は重く、創意工夫をして、日々教育活動をおこなっているのは、タイも日本も同じであった。職員と私たちとの懇談会の最後に、校長の語った一言が深く心に残っている。「教師を幸福にすることが行政の方針で重要とされている。なぜなら教師が幸福であればそれが子どもに伝わるからだ。」今後互いに刺激しあえる関係になれば幸せだと感じた。

ロ．訪問先：Faculty of Environment Resource Mahidon University

当初プログラムになかったが、帰国青年が所属しているということで大学を視察した。この大学は、Mahidon大学の分校で、自然科学系の大学院である。バンコク郊外にあり、かなり広い敷地の中に大学施設や学生寮などが林立していた。

大学の特徴としては、「Learning by Training」をモットーに現地実習を重視している。また、興味深いのは、その実習を通して地方での教育活動に積極的に取り組んでいることである。大学独自のコースとして、地方の教師や生徒(各県機関から選ばれた13才以下の子どもたち)に対する地球科学、地理、環境汚染防止の特別講座が設けられており、将来的にはインターネットなどを使って、地方でも講義が受けられるようなシステムを作っていきたいとのことであった。

ハ．訪問先：Samutsakhon県農業

① 農業事務所

バンコクから約15キロメートルのところに位置するSamutsakhon県（海の街という意味）の農業事務所を訪れた。そこで所長のMs. Prapai ChaichanaにSamutsakhon県について話をうかがった。団員一同はタイに来てから何度も地位の高い職に就いている女性を見てきたが、農業所長に会って、タイでは高給職に女性が多く進出しているということを再確認した。同県は海に面している関係で漁業が盛んであり、それに関連した缶詰工場や海産物の冷凍工場が多い。また、田や畑もたくさんあり、塩田もある。県の農作物は、米、蘭、マンゴー、パパイヤなどで、日本へは花や蟹かまぼこ、マンゴーなどを輸出している。また、非常に肥沃な土地に恵まれており、農薬会社、貿易会社などもあるので、タイの県の中でも3番目に生産力が高い。産業振興に成功した地域であるといえる。

農業組織として、農業グループが28、農業主婦グループが24、農業青年グループが16ある。県農業事務所は新しい農業情報が入ると、各グループに情報を送る。事務所では、いかにそれを効率よく行うかということが検討されていた。

② 農業青年グループ

帰国青年が所属する青年グループの農業現場を視察した。

帰国青年のMr. Sakchai Kitchaiは、グループのアドバイザーとなっている。県内の3つの町で農業指導にあたっており、じぶんの蘭園の管理と農業指導と多忙な毎日を送っている。

彼の案内のもと、まず青年グループが共同で管理する魚の養殖場を視察する。長方形に堀をめぐらせたような形になっており、ベルトコンベアーのような機械を使って魚が水揚げされていた。堀の内側の土地では以前養鶏をしていたそうだ。

次に彼の経営する蘭園を訪問した。大きく立派な蘭園であった。彼にタイ農業の現状を聞いてみると、多くの者は田畑をあきらめ工場に働きに行くということであった。また、経営にあたって国からの援助はないらしいが、苦労している様子など微塵も見せることなく、みな明るく、農業をもっと勉強しようとしているのがよく分かった。青年グループのメンバーが言っていた「僕たちは農業を愛しているんだ。」という言葉と、それを言っているときの青年の、なにものにも勝ることができそうな眼がとても印象的であった。

(3) ホームステイ

氏　　名	ホスト氏名	ホスト職業・参加年度・家族構成
荻野美佐子	Hasaya Khaewmafai	商社マーケティングスタッフ　平成9年度　兄
深田いづみ	Dhanyaporn Bhongsopon	公務員　平成9年度　両親、兄弟姉妹
麻生　祐子	Paravee Phaiboonying	TVプロデューサー　平成9年度　父、兄妹
藤田　昌己	Vanugool Noopim	エンジニア　平成9年度　妻
須田　美樹	Maethavee Tanvettiyanont	学生　平成9年度　両親、姉弟

5. 所感及び提言

(1) 調査団所感

短い期間であったが、それぞれが、何かを感じ考える貴重な経験であった。関係機関や帰国青年との意見交換を通して、青年招へい事業について考える機会を得たことはもとより、貧困や環境などについて考え、また、日本について再確認する機会を得た。そして、帰国青年との友情を再確認することもできた。

タイと日本という離れた場所にいながら、手紙などの間接的な方法で交流を続けるのは簡単なようで難しい。互いに行き来しあい直接会うことは、帰国青年にとっても日本側関係者にとっても、互いの関心を喚起し交流を継続させる最も有効な方法であろう。

帰国青年の同窓会の会長は、また日本を訪れ、お世話になった人々と会いたいという。日本にも同窓会に相当する組織づくりが始められているが、日本と各国の同窓会が連携して互いに行き来し合い、そこから何かの行動が生まれ、そして、その行動が互いの地域社会に還元されていけば青年招へい事業はより大きな意義をもってくるであろう。

(2) 団員所感

イ.「人情味薄いって本当か？」　荻野　美佐子

これまで異国の地だと思っていたタイに対して、親近感を覚え、興味が沸いてきたのはタイ青年のホームステイを体験してからである。今回、青年招へい事業アフターケア調査参加の機会を与えられ、受け入れる側から受け入れられる側に立場が逆転した。

一人のタイ青年からタイ国を知るのには情報が少なすぎる。また、十日間はタイを充分に理解する上で決して長い日数ではなく、表面の一部を撫でた程度にすぎないだろう。しかし、一般の観光では決して行くことのできない所、そこで知り得た様々な情報、多くの人々との係わりの中で知ったタイ国はまさに変転の境地であった。

「日本人に比し情け薄い」と聞いていたが、そんな先入観をくつがえしたのがホーム

ステイである。今回お世話になったのは1997年9月来日の経済グループと農業グループの帰国青年であった。団員5人のうち3人はホストファミリーやグループの方、総勢11人でカンチャナブリへ1泊2日の旅行に行く計画が細かなスケジュールとともにできていた。あまりよく理解できないまま、荷物と身体は別々の車に乗り込み出発、まず着いた所はエメラルド寺院だった。ここでは団員5人共一緒になり見物したが、知らぬ間に他の2人はどこかへいなくなってしまった。昼食のためレストランへ車で移動したら、午前中の車の方にお礼もいわぬままいつの間にか別れてしまい、夕方まで走り続ける長旅となった。片言での会話が弾み、気を使ってくれているのを痛感した。その日はバンガローに宿泊した。

2日目は、郊外ならではの絶景、「戦場に架ける橋」で有名なクワイ川鉄橋のあるエラワン国立公園へと案内され、あの山の向こうは、ミャンマーという所まで行った。夕方まで素晴らしい自然の中で過ごし夜遅くそれぞれホストファミリー宅へ別れた。

翌日はアユタヤへ行き、バン・パイン離宮の壮観さに圧倒された。「土産を買いたい。」といっていた私を連れて行ってくれた先は、大きなハンドメイドの店であった。中では織物や色付けなどの実演も見学することができた。人の暖かさには充分に触れ、思いやりに浸りながら「この人たちは日本で親切にされたからそのお返しをしてくれたのではない。人を敬う。思いやる。人の気持ちを理解する。優しい心」からなのだと確信した。

「用事や交通渋滞などで行けない。」と言っていた人たちも来てくれて、あまり広くない会場ではあったが、溢れるほどの熱気で盛大に終わったサンキューパーティー。

言葉や文化・生活様式の違いを充分に感じながらもその壁が最初からないかのように思わせるタイ国。

沢山の素晴らしい出会いに感謝し、このつながりを断ち切ることなく交流を持ち続けて行く所存である。

ロ.「微笑みの国　タイで感じたこと」　深田　いづみ

タイのドンムアン空港を出た瞬間、むあーっとした暑い空気を感じ驚いた。日本は冬だ。タイという国は、年中暑い国だが、私たちが訪れた時期が一番、過ごしやすい季節だそうだ。しかし、12月を冬と記憶する日本人の身体には、たまらなく暑い。私たちは空港からすぐにホテルに向かった。バンコクの渋滞のすごさは、知識としては知っていた。日本の田舎の、のんびりとした道に慣れている私には、到底運転できないと思われた。とにかく、混んでいる。この日は、比較的ましであったが、それから始まる日々の中で、私たちは、何度もそれを痛感した。その混雑を解消するため、電車を走らせるよう工事しているらしいが、遅々として進んでいないようで、その工事

が、さらに渋滞を巻き起こす原因となっているらしい。もし、日本でそんな状態になったらどうだろう。きっと、大問題で、すぐになんらかの解決策を講じるであろう。しかし、タイの人たちは、その渋滞にたいして、驚くほど受け身であるように感じた。タイの人たちと交流する中で、よく日本人の長所としてあげられた、秩序正しさ。反対に私たちが、タイの人たちを語る時にあげる大らかさ。この、気質の違いが、渋滞に対しても感じられた。

しかし、渋滞はバンコクだけに限られ、バンコクから遠のくとそうではない。私のホストファミリーが、同じ調査団員のホストファミリー3組と郊外のカンナチャブリ1泊2日の旅行に連れていってくれた。バンコクから車で3時間ほどのミャンマーとの境にある県であるが、ここにくるまでの道は、驚くほど車の流れがスムーズで、私が乗っていた車の運転手のタニヤは、また、スピードを出す出す…。バンコクをぬければ、このように、いくらでも飛ばせるようだ。

このカンチャナブリという所は、映画「戦場に架ける橋」で舞台になったところで、景色が素晴らしかった。気温もバンコクより少し低いようで、朝などは少し冷え込んだ。オレンジ色の袈裟を着たたくさんの青年僧侶に出会った。タイでは、男の人が一生に一度は出家するらしい。私たちが想像している以上に、タイの人と仏教に関しては密着したものがあるようだ。タイの人たちの信仰心の厚さは、知識の上で知っていたが、一緒に行動すると、それが本当に良く分かった。

ホストファミリーのタニヤと話していると、そのオレンジの袈裟を着た僧侶たちは托鉢にまわっているらしく、タイでは喜んでその托鉢を受け入れるらしい。彼女たちも週に一度は寺を必ず参拝すると言っていた。また、国王に対する敬愛はすごい。それは小さな子どもからお年寄りまで、まんべんなくといった感じで、ホストファミリーに5歳になる男の子がいたのだが、たった5歳でもラマ国王の肖像画の前では、手を合わす。日本とは違うなあと思った。

また、タイの人たちは、非常に目上の人を敬う。カンチャナブリへの小旅行にタニヤのお母さんが一緒に来ていたが、そのお母さんのことをみんなが本当に大切にしていた。思えば、私の家にホームステイに来たノックも私の母のことを非常に気遣ってくれた。私は、それが彼女の性格かと思っていたが、タイの人みんなが、目上の人を敬うのだと、ここへ来て初めて知った。

カンチャナブリへの旅行を計画してくれた3組の家族たちは、昨年の10月に経済グループで日本の青年招へい事業で来日していた人たちで、その時に、日本のホストファミリーにお世話になったと口々に語り、だから、今回のこの私たちのもてなしも、日本人への恩返しだと言っていた。彼らは、本当に親切で、細かいところまで気を遣ってくれた。彼らは日本に対して非常にいい感情をもっていることが、よくわか

る。しかし、それは彼らが日本に来て、日本人と接したからである。ホストファミリーのタニヤと話していると、日本に来る前は、日本人はクールで経済大国の仕事人間だと思っていたと言っていた。そういえば、農業グループの青年も日本に来る前は、日本人は、経済大国である故、タイのことを見下しているのではないかと思っていたと言っていた。しかし、日本人と接してみて、その感情はぬぐわれ、日本人の長所を仕事にもとりいれていきたいと話してくれた。日本人と未だ接していないタイの人は、果たしてどう思っているのだろうと、ふと思った。改めて、国際交流の大切さを実感した。

今回、多くのタイ人と接して、感じたのはタイの人たちの優しい人柄とおおらかさだ。タイは年中、暑い国で、凍えることがないという余裕を感じた。また、信仰心の厚い国なので、人に施すことが自然にできる。日本に帰った今でもつい思い出すのが、タイの人の、あの優しい微笑みだ。タイは、本当に微笑みの国だった。

しかし、バンコクは発展しているが、大通りを外れると、貧しい暮らしをしている人が多いのが、一目でわかる。タイという国は、その微笑みで私の心を潤してくれたが、微笑みの裏に隠された苦しさというものも同時に感じさせた。バンコクの道で多く目にした障害者の人たちは、どういう生活をしているのだろう。座り込んで、缶にお金を入れてくれと言う。手がない人、足を怪我した人、顔をやけどした人、普通の仕事には、おそらく就けず、わずかのお金で生計をたてているのであろうか。私は、彼らにお金をあげるべきかどうか、その前を通る度、何度も、悩んだ。そのお金をあげるという行為は、もしかして彼らを見下していることになりはしないか。また、こうすることが彼らの自立を妨げることになるのではないかと。しかし私は、最後の日、缶にお金を入れた。それは、先のことより、まず、今日のごはんを彼が食べられたら、それは、それでよいことなんだと思ったからだ。しかし、今でも複雑な思いである。

今の私にできることなど、何もないが、タイの国を大好きでいよう、そして少しずつであるが、自分の周りの人にタイの事を語っていこうと思う。そして、微力ではあるが、国際貢献を少しでもしていけるよう、これからもホストファミリーをさせていただこうと思っている。

ハ.「タイで私の心を捉えて放さなかったもの」　麻生　祐子

「人間教育の一つとして、国際理解教育は重要。より正確に、分かり易く子どもたちに教えるためには、教師の資質向上が不可欠だ。倫理学習をしたり、見聞を広めたりしなくては。」職場である学校でも、家庭でもよく話していたのだが、今回機会に恵まれて、このアフターケアチームの一員となり、タイ訪問をすることができ、感謝し

ている。百聞は一見にしかずの諺通り、貴重な体験を数多くさせてもらった。普通の海外旅行では行けない所にも行き、特別な人にも会うことができた。

その中から、タイの国の情勢や文化、国民性の一部を見ることができた。私が体験し、得たことは、タイの全てではないが、私の価値観にも今後影響を少なからず与えそうである。

本プログラムの中で、最も緊張し、不安を抱いていたものがホームステイである。言葉は通じるだろうか、自分の思いが伝えられるだろうか、に始まり、様々な不安が胸一杯に広がっていた。私が日本で受け入れた青年も、きっと同じ思いで我が家を訪れたのだ。今更ながら彼女の不安を思いやったりもした。

タイ訪問は観光旅行に続き、2度目である。1度目の時からタイ料理にも、タイの人の人柄にも好感を持ち、多少のことは異文化圏に来たのだからこんなこともあるよ、と落ち着いている私も、2泊3日のホームステイには少々ビクついていた。全く知らない人と環境に対する恐れや戸惑いに外ならない。ここにきて、自分の小心ぶりや異なるものへの敬遠ぶりを知ることになろうとは。

しかし、ホテルでホストファミリーと会った時から、彼女たちはフランクで、そんな私の気持ちを知ってか知らずか、にこやかに且つ、きめ細かい態度で接してくれた。

彼女たちに出会った瞬間から、私の不安は消えていた。私は彼女たちと過ごした3日間を生涯忘れることはできないだろうし、素晴らしい思い出である。

ホストファミリーの帰国青年は、農業グループで1997秋に来日したケーオさん。女性テレビプロデューサーである。家族は父、弟、妹2人、妹の夫。普段はバンコク市内に住んでいるが、週末は家族揃って妹の夫の実家であるトウさんの持ち家にやって来て、のんびりと過ごす。バンコクの隣にある町で、一戸建ての美しい家だ。芝生を敷き詰めた庭には、私の好物となった果物カヌーンの木や、とうがらしの低い木もあり、この家の持ち主であるトウさんが描いたイラストが、部屋の壁にそっと息づく。実は彼はイラストレーターであった。同じく芸術家である妻、ミャーオさん手作りの家庭料理をいただいたが、辛い中にも味わいがあり、「アロイ。」を連発した。不安定な経済状態を全く感じない程、家族の表情は明るく、食卓も華やいでいた。

彼女たちは2日目に、私をタイらしい景色のある所へと案内してくれた。水上バスで(と言っても、ボートだが)川を走るのだ。船乗場でつながれたボートに乗り込み、出発まで波に揺られていると、少々気分が悪くなってきた。「早く出発しないか。」と時計をちらちら見ている私に、ケーオさんはにこやかに言った。「この舟に人が一杯になるまで出ないよ。」「……」なんといい加減な！日本人はそう思いがちである。私も然り。でもそれがタイなのである。それは、細かいことにこだわらない大らかさ、

大抵のことは受け入れる心の広さなのだろう。分単位で動き回っている私たちの生き方がふと滑稽に思えた。

この舟から決して派手でない、素朴なタイの町と人を垣間見ることができた。豊かさは感じられない。しかし自然をうまく利用し、調和して生きているように見えた。舟から降りて、船着き場で佇んでいる私の隣に来たケーオさんは、私に「ユウコは田舎町が好きか。」と聞いた。そして自分はいつの日か、こういう田舎に住みたいのだと語った。都会は駄目だ、心を失うとも言った。昔から受け継がれるタイの伝統を守っているような田舎町は、自分の心を温かくしてくれ、勇気をくれる。いつの日かきっと住みたい。そう静かに話す彼女の横顔は、私の心に波紋を広げた。私は自分の価値観に、疑問を感じた。彼女が自分の祖国に誇りと愛情を持っていることが、手に取るように分かった。ポリシーのある生き方、今自分が大切にしたいことは何なのか、日本人としての自分はどうあるべきか、彼女の言葉や顔を思いだしながら考えている。

その日の夜、「お茶セレモニー」と言って、私が日本から持って行ったお抹茶と手作りわらびもちでのお茶会を開いた。その日本の伝統文化にも、日本人の私にも敬意を表してくれた。そしてもっと知ろうという彼女たちは、私を質問責めにした。果たして私は日本文化を語れる程知っているのかというと疑問が残る。日本を知らない日本人の一人だと、自分を知った。

最終日、仕事に出る皆と別れて、私とケーオさんは私の泊まるホテルへと向かった。

途中、カルチャーセンターへ寄った。そこは日本とタイのことがわかるところだが、その中の図書館で私たちはしばらく過ごした。ケーオさんはタイ語で書かれた日本についての雑誌を読み、私は日本語のタイについて書いた雑誌を読んだ。黙ってページをめくるだけの時がしばらく続いたが、私はこの時間がとても幸せだったと今でも思う。隣にいる外国人同士が、互いに互いをわかりたいと思う一心で、共通の時を過ごした。これこそ国際理解なのではないか。

3日間のホームステイを終えて、大変有意義だったと思う。実際に触れ合わなければ分かりあえないし、上辺の美しい部分だけ見ているのでは理解につながらない。たった3日という非常に短い時間ではあったが、分からない言葉を分かろうとし、慣れない文化にも慣れようとした。その気持ちだけは通じ合ったと思っている。

全プログラムを通じて、出会った人は、私たちに温かかったし、将来においても友好関係を築いていけそうに感じた。

ただ、同時に、タイ滞在中に強く私の心を捉えていたものは、街角で紙コップを揺らしている子どもたちや、障害児の目だった。私たちの目からは、社会から見捨てられた人たちのように見えた。「それはそれで彼たちは不幸だと思っていないよ。」とい

う言葉を滞在中に聞いて、何故だかわからず、奮然とした気持ちにもなった。

しかし、10日間が過ぎ、少し分かった気がする。仏教思想から「人に迷惑をかけてもいい。余裕があれば、人を助ければいい。」というのが定着しているのだという。人に迷惑をかけるな、という教育をする日本。迷惑をかけてもいいから助け合えというタイ。誰かが助けてくれるから、自分のおかれている立場も生活も不幸とは思わないのだろうか。あの人たちはタイの国から見捨てられた訳ではないのだな、と思った。私は「迷惑はかけてもいい。困っている人がいたら手を差しのべる優しさを忘れないで。」と日本の子どもたちに伝えたいと思った。

大きなことは何一つできない私でも、国際貢献はできるはずだ。子どもたちに伝えていくことも一つだと思う。しかしそれは、いつも日本が支援しているという形での国際貢献、理解であってはならない。物質的、経済的には、確かに日本が豊かであるかもしれない。だが、別の面においては、日本より優れたことは多いし、日本が学び、採り入れねばならないこともある。そういう文化的、精神的交流がもっと深くなされるようになることを希望する。

価値観は違っても、平和的、普遍的交流が今後も継続していくことを心から期待する。微力ながらでもできること、今の私の生き方も見直すことのできるプログラムであった。

ニ.「『暑い』と『とても暑い』の国」　藤田　昌己

タイに来た最初の印象はとにかく暑かった。日本が冬であったせいもあり、特にそれを感じて、こちらはまさに日本の夏だなと思った。バンコク市内に入ると、噂に聞いていた交通渋滞の中に入った。交通渋滞は日本にもあるので、僕はそれほどの違和感を感じなかった。むしろ、かえってゆっくりタイを見て廻れると喜び半分であった。

私達は調査団としてアフターケアをしに来たので、連日ぎっしりと詰まったスケジュールが組んであった。そのどれもが、タイの人達の、来客を歓迎しようとするのがよく分かるものであったので、嬉しかった。そのためタイに着いて3日目には、タイの人達がどのような考えを持った人達であるのかと云うのが分かりかけた気がしたし、もう一ヶ月ほど滞在しているんじゃないかと思えるほど、「タイ」でおなか一杯にもなれた。私がそう感じるようになったのは、タイ人と日本人の考え方の大きな違いのためであると思う。2日目に国立青年局（NYB）を訪問した時には特にそれを感じた。

NYBの訪問での意見交換では、日本側とタイ側の話が大きく食い違っていたように思えた。日本側がこうだと云っても、タイ側ではそれはいったい何の事だと云う。

それはもう根本的な考え方が違っているのであってもっと親交を深めていかないと互いに理解し合うのは難しいと思えた。

僕をホームステイで受け入れてくれたジャックさんは、顔をしかめつつ「いやー、暑い暑い、タイの季節には『暑い』と『とても暑い』しかないね。」と頻りに云っていた。僕はここにタイ人の考え方と、日本人の考え方に違いが出る要素があるのではと思った。日本には春夏秋冬がある。「暑い」と「とても暑い」の国と、春夏秋冬のある国では、文化や考え方に違いがあって当然である。例えば、日本では冬に近くなると食料を心配しなければならなかった。ところがタイでは年中暑いため、よく作物が育つのであろうか、食料は行き渡ると聞いた。そういった文化の違いがあるからこそ、ホームステイではいろいろな驚きに出会え、良い体験をする事ができた。

僕のホームステイはジャックさん夫婦と共に旅行に行くと云ったものであった。一般家庭を直に体験すると云うのも良いのだろうけど、こちらも貴重な体験には変わりなかった。ジャックさんの話では、タイの人達の多くは休日になると旅行をすると云う事であった。それならなおさら良い。ジャックさんは僕のために、2泊3日のホームステイのスケジュールを綿密に組んでくれていた。だが、旅行であるだけに食事はすべて外食となり、奢っていただいてばかりいたので申し訳なかった。

ホームステイ3日の内、1日半はジャックさんの友達(日本を訪問した青年達)と、同じ調査団である深田さんと荻野さんと一緒に行動した。僕たちは1泊をカムチャナブリのロッジで過ごし、2日目に山へハイキングに行った。カムチャナブリは避暑地のような所で、人家が少なく、道路では水牛の行進をよく見ることができた。

山の方はと云うと、山頂からぐるぐるかき混ぜたクリームソーダのような美しい川が流れており、所どころで小さな滝を見ることができた。僕は山頂近くまで登ったのだが、傾斜がきつく、一歩一歩踏み出すのが大変であった。しかしそんな山でも、タイの人達は突っ掛けで登るのでとても驚いた。それに暑いせいか、休憩をするたびに服のまま近くの川に飛び込むのである。水に濡れるとよけいに疲れるのではと思ったが、タイの人達はそんな事はおかまいなしであった。僕もそれならと一緒になって水浴びをしたが、やっぱり疲れてしまった。

3日目の最終日にはタイの田舎に連れて行ってくれた。ジャックさんの仕事が田舎の基礎を作ると云うものであったので、その仕事に付き合いつつ農地を見せてもらった。農地はプロジェクトの実施下にあるため、ここにはココナッツを植え、ここでは鶏を飼うと云うのが全て決まっていた。農地の指導者や、農家の人達は、僕をとても温かく向かえてくれた。そして熱心に作物の話をしてくれるのであった。

どこに行ってもそうであったのだが、誰もが温かい歓迎、楽しい食卓で迎えてくれた。そして気さくな笑顔を見せてくれる。僕にとって、そういった人達との出会いが

何より貴重なものとなった。それは市内を見て廻ったり、観光地を見て廻ったりするだけでは決して得ることができないものであった。きっとタイの青年達も同じ様な事を日本に来て思ったに違いない。

人と人が触れ合う事がない限り、互いの関係が深まる事などない。今回は少人数の小さな出会いであったかもしれないが、それはもっともっと、大きくなる可能性を持ったものであった。タイと日本、関係を深める事によって互いに学び合い、良い方向に向かえる関係が築いてゆけるよう願いたい。

ホ.「タイで印象的であったこと」須田　美樹

「日本にいたときとは、また違った顔が見られますよ。」帰国青年の国を訪れた合宿セミナー参加日本青年が言っていた。青年招へい事業で来日した青年が、どのような生活をし、どんな仕事をしているのか、最も関心のあるところであった。今回、アフターケアに参加する機会に恵まれ、自分の目で彼らの様子を知ることができ、大変有意義な時間を過ごすことができた。

今回の訪問で特に印象に残ったことが3つある。一つは、タイの女性の元気の良さ。二つめは、中国系家庭でのホームステイ。三つめは、職場を訪問させていただいた帰国青年 Chai さんの活躍、である。

まず、タイの女性であるが、社会で高い地位に就いている女性の多さに驚いた。今回訪問した国立青年局・小学校・農業事務所のトップは女性で、対応してくださったスタッフ、教師もほとんどが女性であった。彼女達は、明るく華やかなだけではなく、タイ人としての誇りや強さも合わせ持っているという印象を受けた。

女性の帰国青年達は、日本で合った時にもまして明るく、冗談を言っては大笑いをしていた。微笑みの国の女性のかわいらしさと、経済状況の悪化で様々な建設工事が進まないバンコクの様子を「Everything under Construction !」と言って笑い飛ばしてしまうたくましさを合わせ持った彼女達は大変魅力的であった。

次に印刷業を営む中国系家庭でのホームステイである。中華街にほど近い古いビルの立ち並ぶ所に、ホストファミリーのメイさんの家はあった。1階が工場になっていて、2階は台所、3階、4階、5階が家族の部屋だ。工場のなかにはインクや紙が所狭しと置かれ、印刷機が大きな音を立てていた。神棚のようなものがあり、赤い紙に感じで「万事如意」とか「恭喜発財」とか書かれ、壁にはタイにいる一族の写真が貼られていた。ちょうど12月中旬、カレンダーの印刷で大忙しの時期であったので、メイさん以外は家族総出で夜遅くまで仕事をしていた。民族の文化を守りつつもタイ社会に深く根付き、タイの文化を形成している。民族や国について考えさせられる興味深い体験であった。

最後に、帰国青年の農業を営むChaiさんである。来日中は、大変おとなしかったが、タイで会った彼は全く違っていた。彼が属する農業グループのメンバーを紹介し、グループで管理している魚の養殖場や自分の蘭園を案内してくれたのだが、大変雄弁で、グループのリーダー的存在としての自信に溢れていた。

彼の住んでいるところは、バンコクの中心から車で2時間ほど走ったところで、バンコク市内とは違い、自然が豊かで、素朴な生活が営まれている。自分がその地に立ってみると、無機質な建物に囲まれた日本の都市での生活が、彼にとってかなりのストレスになっていたことが想像できる。

夢を持って農業に取り組んでいる姿を見ていると、可能な範囲で来日青年の心理状態を理解し、彼らにとって少しでも有意義なプログラムを提供したいという気持ちになる。バナナの木の下で、「僕は、農業を愛している。」と言ったChaiさんの顔が忘れられない。

(3) 提言

イ．問題点

① JICAと現地受入窓口機関(NYB)の青年招へい事業に対する捉え方の違い

JICA側は研修色を強めていく方向を打ち出しているが、NYBはあくまでも交流事業として捉えており、事業の捉え方のギャップが大きい。

② アフターケア調査によって得た情報が蓄積されず、十分に活用されていない。

ロ．問題点の原因又は理由

① JICAとNYBの情報交換が十分でない。

② 調査結果を発表する場が報告書しかない。

ハ．改善のための具体的方策

① JICAとNYB、そしてできれば同窓会を交え、定期的(少なくとも年に一回)に招へい分野や人選方法など事業について協議をするようになる。

② 調査結果報告会を開く

例えば、今年度派遣された5つの調査チームと実施協力団体の関係者を集め、報告会を開き、情報を共有し問題点を整理する。そして次年度のアフターケアチームの調査目的を明確にする。

ニ．その他

帰国後の活動のフォローアップについて

帰国後、日本での研修についてレポートを発表したり、テレビで取り上げられたりしている青年がいる。何か活動をした場合は、JICAに知らせてくれるよう帰国青年にお願いしておくなど、帰国後の活動をできるだけフォローアップしてほしい。

中華人民共和国

平成10年2月15日～2月21日

社団法人 青少年育成国民会議

帰国後、日本での研修についてレポートを発表したり、テレビで取り上げられたりしている青年がいる。何か活動をした場合は、JICAに知らせてくれるよう帰国青年にお願いしておくなど、帰国後の活動をできるだけフォローアップしてほしい。

中華人民共和国

平成10年2月15日～2月21日

社団法人 青少年育成国民会議

I. 調査目的

1. 調査目的

「新日中青年の友情計画」及び「新中国実務者招へい計画」に基づく青年招へい事業によって来日した、中国青年との交流を両国の相互交流に発展させるべく、また来日時に形成された友情を永続的に、より深めることを目的として実施した。

2. 調査内容

(1) 国際協力事業団(JICA)中華人民共和国事務所

・中国一般事情及びJICAの中国における協力活動状況など

・中国における青年招へい事業の評価と今後の展望など

(2) 在中華人民共和国日本大使館

・中国の派遣窓口(青年＝中華全国青年連合会、実務者＝外交部)の違いによる本事業の評価など

・中国における日本の経済・文化などの青年たちの関心度など

(3) 中華全国青年連合会

特に、1か月間の日本滞在中の研修プログラムが帰国青年にいかなる影響と成果を与えているかなどを中心に下記の事項について聴取した。

・表敬及び同連合会の組織と活動内容など

・本事業に関わる青年の募集と応募青年の本事業への関心度

・帰国青年の国内での活動状況(全般的に帰国後青年たちがどのように日本滞在経験を活かしているかなど)

・今後の本事業推進に対する要望(含む、日中両国の青年間の友情を永続させる方途について)

・今後のアフターケア調査に対する要望など

(4) 帰国青年の活動現場視察(職場訪問)

・帰国青年が日本滞在中に得た経験や知識を、どの様に職場や地域で活かしているのかについて

・帰国後の青年の職場での活動を通じて、中国青年の21世紀に向けた国造りへの意欲などに理解を図る。

(5) 帰国青年との交流・懇談

・帰国直後の青年などを対象に、本事業に参加して得た様々な体験や知識を、自分たちの身の回りで活かしているか

・帰国青年たちがもつ対日イメージや対日本人観などについて聴取するとともに、それらがより深く正確なものとなるよう促進

・日本青年との友情持続(合宿セミナーでの出会いを含めて)への関心と意欲について

(6) 帰国青年の家庭訪問

・中国の一般的家庭訪問を通じて、青年たちの普段の生活や考え方を学ぶとともに、生活習慣や文化などについて学ぶ

3. 調査団員(下記参照)

	氏　名	所　属　先	(青年招へい事業との関わり)
リーダー	湊　明弘	(社)青少年育成国民会議	実施協力団体実務担当者
メンバー	宮　順子	(財)岩手県国際交流協会	地方受入実施協力団体実務担当者
メンバー	山元　明美	(社)青少年育成沖縄県民会議	同上及びホストファミリー
メンバー	林　三花	(株)京王観光	合宿セミナー参加青年

II. 調査結果

1. 日程(下記参照)

2月15日(日：快晴)

10:40　新東京国際空港発(JL781便)

14:30　北京国際空港着

15:30　漁陽飯店(ホテル)チェックイン

＊滞在中の日程などに関するオリエンテーション

(中華全国青年連合会／役職員出席)

18:00　晩餐(嘉年華大酒楼)

19:40　中国伝統芸能の観賞(老舎茶館)

21:50　ホテル帰館

2月16日(月：晴)

10:45　ホテル出発

11:00　JICA 中国事務所訪問

12:30　昼食（金迄閣火鍋城／JICA 中国事務所主催）

14:00　中華全国青年連合会訪問

15:00　同連合会内、中国青年志願者協会訪問

16:30　天壇公園見学

18:00　歓迎宴（御膳飯店／中華全国青年連合会主催）

21:00　ホテル帰館

2 月 17 日（火：晴）

08:30　ホテル出発

09:00　北京青年報訪問（1994 年青年指導者グループ参加青年／勤務先）

10:50　琉璃街（古文化街）散策

12:00　昼食

14:00　帰国青年との座談会（中華全国青年連合会）

18:00　歓迎宴（傣王宮／中華全国青年連合会・国際部主催）

2 月 18 日（水：晴、夕刻より雪）

08:30　ホテル出発

10:00　万里の長城見学

12:30　昼食（宮廷大酒店）

14:30　北京連合大学訪問（1997 年教育グループ団長／勤務先）

16:00　アジアオリンピック選手村の跡地利用状況についての参観

18:00　歓迎宴（全聚徳焼鴨店／ 1997 年経済グループ参加青年主催）

20:30　ホテル帰館

2 月 19 日（木：雪のち雨）

09:00　ホテル出発

09:30　天安門広場参観

10:00　天安門地区管理委員会訪問（1994 年青年指導者グループ参加青年／勤務先）

10:30　天安門城楼参観

11:20　故宮（紫禁城）参観

12:30　昼食（中山公園来今雨軒）

14:00　一時ホテル帰館（家庭訪問の準備）

15:30　＊メンバーホテル出発

16:00　家庭訪問（1994年経済グループ参加青年の家庭）

17:30　＊リーダーホテル出発

18:00　歓迎宴（1994青年指導者グループ北京市内在住参加青年主催）

22:30　全員ホテル帰館

2月20日（金：曇）

09:30　ホテル出発

10:00　在中国日本大使館訪問（公使表敬及び滞在中の報告）

11:00　JICA中国事務所訪問（帰国報告）

12:30　懇談昼食会（二十一世紀飯店／中華全国青年連合会主催）

14:00　一時ホテル帰館

＊滞在中の視察及び聴取事項の確認と帰国報告書の整理

15:30　ホテル出発

18:00　答礼宴（華東飯店福万楼／調査団主催）

20:30　ホテル帰館

2月21日（金：晴）

06:30　漁陽飯店（ホテル）チェックアウト

07:00　ホテル出発

09:20　北京空港発（CA925）

13:50　新東京国際空港着

2.　主要面談者

（1）訪問先

イ．在中国日本大使館（2/20）

○吉澤　裕	公使
○井上　健	一等書記官

ロ．JICA中国事務所（2/16. 18）

○松澤　憲夫	所長
○新井　明男	次長
○藤本　正也	所員
○楊　　鉄玲（Ms. Yang Tieling）	所員

ハ．中華全国青年連合会（2/16）

○巴音　朝魯（Mr. Bayin Chaolu）主席代行（常務副主席）

○劉　　合華（Mr. Liu Hehua）副秘書長

○倪　　健（Mr. Ni Jian）国際部副部長

○萬　　學軍（Mr. Wan Xuejin）同上　日本担当課長

○賈　　國群（Mr. Jia Guo Qun）同上　総務担当課長

ニ．中国青年志願者協会（2/16）

○卢　雍政（Mr. Lu Yong Zheng）常務理事（中華全国青年連合会、常任委員）

○赵　　鵬（Mr. Zhao Peng）共青団中央青年志願者行動指導者センター部長

(2) 帰国青年活動現場視察（勤務先）

イ．北京青年報訪問（2/17）

○肖　　培（Mr. Xiao Pei）編集長（'94年青年指導者グループ参加青年）

○賀　帜生（Mr. He Zhi Sheng）副編集長

ロ．北京連合大学訪問（2/18）

○韓　憲洲（Mr. Han Xian Zhou）副校長（'97年教育グループ・団長）

○李　建中（Mr. Li Jian Zhong）副教授、外事辦公室副主任

ハ．北京人民政府、天安門地区管理委員会訪問（2/19）

○王　藍栄（Ms. Wang Yunrong）副主任（'94年青年指導者グループ参加青年）

(3) 帰国青年との座談会（2/17）

○劉　　剣　中華全国青年連合会協調工作部副部長（'97年青年指導者グループ参加青年）

○王　偉群　中国青年報社新聞センター主任記者（'97年青年指導者グループ参加青年）

○毛　暁峰　中国青年実業家発展促進会議公室副主任（'97年経済開発青年グループ参加青年）

○陳　祖新　国務院研究室宏視経済室所長（同　　上）

○王　新宇　中国対外貿易迄輸公司経理部秘書（同　　上）

○喬　東平　北京青年政治学院講師（'97年経済開発青年グループ参加青年）

○高　彦明　中国少先鋒隊全国工作委員会郊外教育部副部長（同上・秘書長）

○梁　伝軍　中国高級人事管理官訓練センター所長（'96年公務員グループ参加青年）

(4) 歓迎懇談会

イ．歓迎宴（中華全国青年連合会主催）(2/16)

①中華全国青年連合会出席者

○曹　衛洲　(Mr. Cao Wei Zhou)　首席補佐

○倪　　健　(Mr. Ni Jian)　国際部副部長

○萬　學軍　(Mr. Wan Xuejin)　同　上日本担当課長

○劉　京山　(Mr. Liu Jingshan)　中央電視亶新聞記者　('94年青年指導者グループ参加青年)

○劉　衛兵　(Mr. Liu Wei Bing)　新華社撮影部記者　('97年青年指導者グループ参加青年)

○万　　杰　(Ms. Wan Jie)　北京口腔医院技師　('94年青年指導者グループ参加青年)

②日本側出席者

○井上　　健　日本国駐華大使館一等書記官

○松澤　憲夫　JICA 中国事務所長

○藤本　正也　同上　所員

ロ．夕食懇談会 (2/18)

①中華全国青年連合会出席者

○王　希宏　(Mr. Wang Xi-Hong)　中華全国青年連合会国際部日本担当課長

○萬　學軍　(Mr. Wan Xuejin)　同上

②青年出席者（1997 経済グループ参加青年）

○伊　　梵　(Ms. Yi Meng)　伊人广告公司

○叶　興慶　(Dr. Ye Xingqing)　国務院研究室

○何　梵通　(Mr. He Meng Tong)　中国鉄路技術公司経管部

○王　　勇　(Mr. Wang Yang)　中国深　立利技術公司北京分公司

ハ．懇談昼食会 (2/20)

①中華全国青年連合会出席者

○湯　本淵 (Mr. Tang Ben Yuan)　団長（中華全国青年連合会国際部副部長）

○萬　學軍 (Mr. Wan Xuejun)　中華全国青年連合会国際部日本担当課長

②帰国青年出席者（1997 年公務員グループ参加青年）

○劉　会増 (Mr. LiuHui Zeng)　国務院事務庁秘書四局副所長

○易　飛先 (Mr. Yi Fei Xian)　国務院新聞報道事務室副所長

○常　樹梅 (Ms. Chang Shu Mei)　鉄道部事務庁副所長
○劉　学透 (Mr. Liu Xue Tou)　税関総署統計局副主任課員

ニ．答礼宴 (調査団主催)

①中国側出席者

○倪　　健 (Mr. Ni Jian)　中華全国青年連合会国際部副部長
○萬　學軍 (Mr. Wan Xuejin)　同上　日本担当課長
○王　希宏 (Mr. Wang Xi-Hong) 同上
○李　冬梅 (Ms. Li Dong Mei)　中国共青団雑誌社副編集長　(96年青年指導者グループ参加青年)

②日本側出席者

○井上　　健　日本在中国大使館一等書記官
○藤本　正也　JICA 中国事務所所員
○楊　　鉄玲　同上

3.　調査結果概要

今回の調査では、日程的に短期間であり、訪問地も北京市のみであったことで、中国全土から来日する青年の帰国後の動向を全て把握するのは困難であった。そこで、日程の許す限り、できるだけ多くの帰国青年との出会いを通じ、彼等の意見を聴取することに主眼を置くことにした。

座談会では帰国直後の青年を中心に、帰国青年の活動現場(職場)訪問では、帰国後4～5年経過した青年を中心に、日本での体験を含む事業の成果について聴取した。また、昼食時においても、できるだけ都合のつく帰国青年に集まってもらい、食事を共にしながらの歓談を通じて日本滞在の印象や帰国後の活動などについて語ってもらった。

1987年に中華全国青年連合会を窓口に開始された「日中青年の友情計画」も1993年から「新日中青年の友情計画」と名称変更し、その内容の充実を図り、10年を経過した。また、1990年から始められた「中国実務者招へい計画」も近年、外交部を窓口として実施され、1993年からは同様に「新中国実務者招へい計画」と改め、8年が経過し、両事業に参加した中国青年は合計約1,800余名となった。帰国後は、中国全土で活躍しており、その活動形態も様々であり、多くの帰国青年は転職や留学等してどの機関・団体でもその掌握は大変困難な状況にあることから、帰国青年のその後の活動状況を細部まで追跡調査することは不可能であった。

しかしながら、今回の調査で出会った多くの青年たちから耳にした、他の帰国青年たちの消息からもうかがえるが、本事業に参加した中国青年たちが、確実に日中友好の根を

張っていた。また、今回の調査で出会った帰国青年たちの全ての青年たちが、自国の国造りに邁進する青年指導者であることから、日本(人)の良い面、悪い面を含めて、率直に自国の人々に語れる機会を得られたことで、異口同音に本事業の成果を称えていた。さらに日本での体験や見聞したことを自分たちの職域や活動域の中で報告する機会を得て、率直に多くの中国の人々に日本を知らしめるとともに、自分たちの将来に生かしている状況を実際に目にしたことで、本事業の本来の目的を達成していることを確認できたことは素晴らしいことであった。

今回の調査では、中華全国青年連合会が受入窓口となって、本調査団の全日程をアレンジしていただいたが、誠に心いきとどいた内容とお世話であったことを、団員一同心から感謝の意を表するものである。併せて帰国青年を含め中国で出会った多くの方々の誠意溢れた応対にも心から感謝する次第である。

特に今回参加したアフターケア参加者は受入実務担当者を中心として構成されていたことから、今後の受入及び中国で出会った帰国青年との友情の絆を深め、継続していくことに、必ずやこの体験が大いに生かされるものと確信している。

中華全国青年連合会の下で中国青年志願者協会(中国ボランティア協会)が設立され、弱者に対する支援及び工業発展の途上でおきる公害問題に関わる環境保全活動など様々な活動に多くの若者が自発的に参加している状況には驚いた。西欧式ボランティア活動が社会主義体制の国で試行錯誤しながら十分に機能し定着することを、心から期待し、関係者の一人として見守っていきたいと思う。

また、青年のボランティア活動と併せて現在、同連合会の呼びかけで中国青少年発展基金会(China Youth Development Foundation)が設立され、国内の貧困地区の子どもたちへの救済活動の一環として積極的に推進されている「希望プロジェクト(China Project Hope)が中国全土で展開されており、食料支援や教育支援及び1本のさくらんぼの木を植えるための支援(収穫収入を得るため)など様々な子どもたちへの支援活動を行うために、個人や企業から1口580元(約9,300円)の浄財を募っている。

今後は来日する中国青年を通じて日本青年をはじめ受入れに関わる多くの関係者に今日の中国の正しい情報を提供するとともに、こうした支援活動にも積極的に協力することが、21世紀に向けた新しい日中友好の懸け橋となることと期待したい。

4. 現地調査・活動内容結果

以下、今回の調査で関係者からの聴取した結果を報告するが、従来の調査での聴取内容報告と重複する事柄は全て割愛することとした。理由は、本調査は毎年継続実施しており、全て積み重ねの上で本事業の改善充実が行われているからである。従って、今年度の報告においては、これから受入れる関係者にとって必要で参考になる新しい情報を提供し

報告することが本調査団の責務と考えたからである。

(1) 表敬・訪問先における聴取内容

イ．巴音　朝魯　中華全国青年連合会主席代行（常務副主席）表敬時の発言要旨

a．この青年招へい事業が、1987年に開始されて以来、約1,000名の中国青年が日本を訪問した。10年経過しても、日本での様々な研修を通じて培った交流は今なお継続されている。数ある中日青年交流事業の中でも、この招へい事業は重要かつ中心的な存在である。

特に、日本での一般家庭滞在（ホームステイ）プログラムを通じての交流では、心と心のふれあいを感じ合い、より深い人間同士の相互理解に大きく貢献している。また、合宿セミナーでは、幅広いテーマで議論を交わすことにより、未来に向けての建設的な話し合い及び交流が促進され、中日青年の相互理解に多大な成果を挙げている。

b．そこで、このプログラムを一層充実させ発展的なものにするために、私は中華全国青年連合会を代表して、次のような提案させていただきたい。

i.　中国参加青年の専門性を重視し、その専門をさらに深く掘り下げる内容にしていただきたい。

＊　例えば、現在の大きな問題である東南アジアを含めたアジアの金融危機などのテーマを取上げ、同じアジアに生きる青年として、この問題の解決に向け、どの様な対処方策が考えられるかを議論する。

＊　また、経済発展した日本の先進的な部分の視察。例えば、企業の管理体制、品質管理及び在庫管理を含む市場調査の実態などについて学ぶことは、中国青年にとって大きな意義がある。特に、経済青年グループにおいては、日本の先進的な部分の研修が大いに期待される。併せて、大企業を支える中小企業のしっかりした企業理念についても関心が高いところである。

ii.　合宿セミナーに参加する日本側参加青年は専門性を重視され、できるだけ年齢も合わせていただきたい。

＊　日本側にも事情があることは十分認識しているが、日本青年の少なくとも半分は専門性を重視した青年を含めてもらいたい。例えば、教育グループで参加した場合、中国側は大学の講師、教授クラスが参加しているのに日本側は学生または小中学校の教諭で構成されており、議論が噛み合わない場合がある。そうしたことは、お互いに不幸であり内容のある交流実現に向けて残念

な結果になってしまうからである。

(2) 帰国青年活動現場(職場)

イ．北京青年報

訪問した北京青年報の肖培編集長は、1994年青年指導者グループの参加者であった。同氏は本事業に参加帰国後は、参加する以前の自分が描いていた日本とは非常に落差があり、自分の視点を正すことができたと、個人的にも招へい事業を評価していた。また帰国後は、新聞を編集する際にも参加以前とは別の角度からも日本からの様々な報道(情報)を処理できるようになり、同氏が主催して、日本での阪神大震災後には座談会やシンポジュウムを開催し、日本での迅速な救援活動の実態などについても中国人民に伝えたと語った。

[北京青年報(社)について]

各省で青年報や青年雑誌が出版されていたが、北京市ではその種の情報紙が出版されていなかったことから、1981年に北京青年報(社)が創立された。創立当時は、発行部数約29,000部の週刊で職員は十数名の規模であった。現在では、発行部数約20万人を越す日刊紙を発刊しており、職員は400人で平均年齢は30歳の青年たちで、女性職員が約半数を占めている。日刊紙の他に小学生向けの週報を40万部、中学生向けに週刊時時報を30万部発行している。

記事の特徴としては、できるだけ青年の視点から見たり感じたりした記事を執筆するように心掛けていると語っていた。

＊ある日の北京青年報(1998年2月17日号から)

1面：北京の道路建設について

2面：経済問題('98年国債発行、国産の豪華乗用車登場など)

3面：社会問題(ごみの山を埋めて農場用地に、エルニーニョの影響など)

4面：国内(金融危機による人民元切下げはないという記事など)

5面：特集(2／14の武漢長江大橋爆発事件について)

6面：文化(映画、劇、新書紹介記事など)

7面：香港・マカオ・台湾関係(香港特別区の新年度予算など)

8面：国際(イラク危機、エジプトでロックグループの締出しなど)

9、10面：スポーツ(長野オリンピック、サッカー関連記事)

11面：健康(シェイプアップ、標準体重など)

12面：美術(文化革命時代の美術作品、美術史など)

13面：愛情(私たちにとって性は身近か、バレンタインデーの北京など)

14面：コラム（社会人入試試験を行う学校紹介）
15面：（14面の続き及び自画像人気など）
16面：愛情（孤児や孤児院など）
が掲載されているタブロイド版の日刊紙であった。

ロ．北京連合大学

訪問した北京連合大学の韓憲洲副校長は、1997年教員グループで団長として来日した。まだ帰国して間がないためか、非常に日本での思いが強く我々一行を熱烈に歓迎してくれた。また韓副校長は帰国直後の学生を対象に日本の教育事情や様々な体験などについて、何回かに分けて講義され多くの学生たちから質問を受けるなどして、学生たちがこんなに日本への関心が高いのかとびっくりしたと語っていたのが印象的であった。

韓副校長は、日本での滞在プログラムについて、次のように要望された。

①専門分野の尊重…自分たちの教育グループは大学の授業クラスで構成されていたが訪問先では大学高等教育の現場視察や教授クラスの日本青年との交流が皆無であったことから、今後はできるだけ参加青年の分野を考慮したプログラムを望みたい。

②ホームステイプログラムの重視…日本を訪問する青年たちにとって、日本は他の外国に比べて非常に関心が高い。中には過去の両国間におきた不幸な歴史から心に傷を持っている青年も参加している。しかし、日本での一般家庭滞在（ホームステイ）で率直な心の触れ合いができたことから、多くの青年が過去の忌まわしい出来事をのりこえ、これからの日本や日本人との関わり方について学べたと評価会や帰国後の報告で述べている。こうした中国青年の評価からもうかがえるように、ホームステイプログラムは、本当の日本や日本人を知るための重要なプログラムであるので、これからも是非続けていただきたい。

③幅広い日本理解のために…たとえ専門分野が教育であっても、訪問視察先には是非、日本の経済発展の実情を知ることは、現在の中国青年にとっては必要なことであることから、日本を代表する企業の訪問も計画されることを望みたい。

このあと、李建中外務辦公室副主任とともに連合大学の概要説明と学内を案内してくれた。

［連合大学の概要］

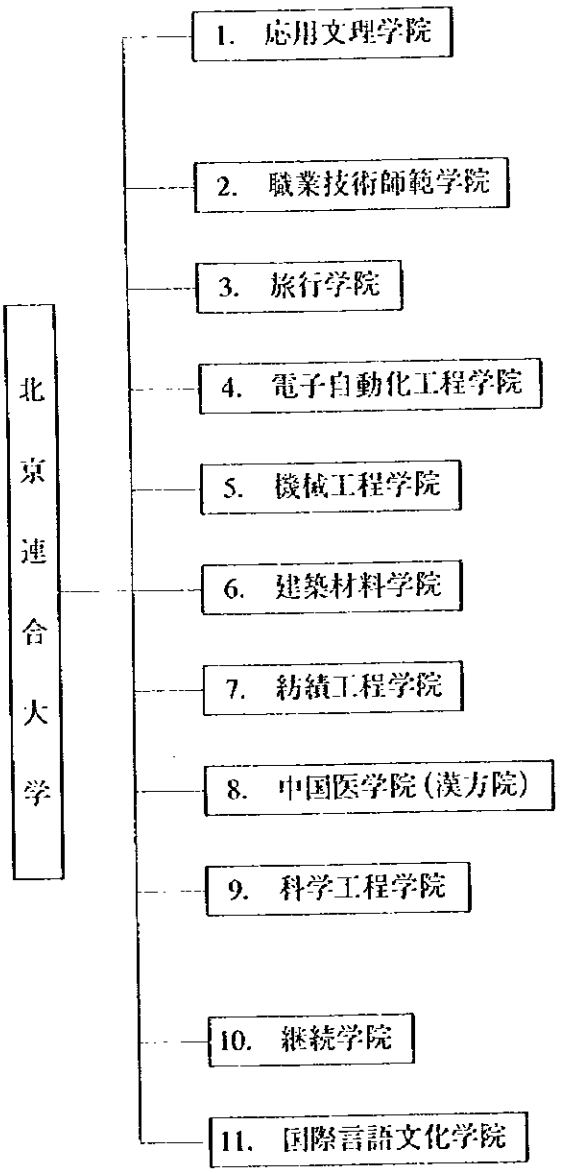
＊学生総数：11,278人、＊教師：3,143人（専門教師：1,326人、正副教授：416人、特に社会に貢献している専門家など32人）

＊大学の特徴：①北京市内・近郊の青年たちを対象とし、北京市の経済発展を図るた

めに、様々な職業分野に関わる専門性を備えた教育の機会を与えることを目的として大学の連合組織として設立された。 ②北京市内に11校の職業教育専門の大学が設置され、約70科目が用意されており、連合大学の本部が全て統括し、卒業証書も連合大学名で手交している。 ③教育の形式は、全て適性に応じた4年制コースと研究コース、夜間及び通信教育短期コースが準備されている。また、既に社会人となっている青年にも教育の機会を提供できるよう、社会人短期コースもある。

④現在では、北京市郊外からの遠距離通学者及び友好国からの留学生のために食堂や寮(自炊設備も設置)も併設されるなどの環境整備が図られている。

＊連合大学の構成(11学院)：



前身は北京大学、人民大学の分校が一つになった学校。

ファッション関係

旅行関係、業務用外国語

社会人のための技術訓練コースもある

自動車練習学校も併設

機械設計製造(工業用冷凍機械の研究)

中国刺繍の訓練コース設置

化学技術取得者のための専門的人材育成(教育と研究、生産)

社会人のための学院

(3) 一般家庭訪問(ホームビジット)

イ. 目的

中国と日本家庭との共通点、相違点を探る。

ロ. 受入家庭と家族構成

①ホストの氏名:房　光輝(41歳、鉄道建築会社勤務／1994年経済グループ参加青年)

②家族構成：現在5人家族

本人　(職場が地方のため1～2週間に1度の割合で帰宅)

妻　(夫と同系列の会社の鉄道関係情報紙編集記者)

子供

母　(孫の世話のために山東省から上京)

義妹　(義兄が留守がちのために同居。会社員)

義弟　(当日、わざわざ立ち寄り、我々を歓迎してくれた。北京師範大学4年生)

③住所：北京市復光路40号文協(北京郊外)

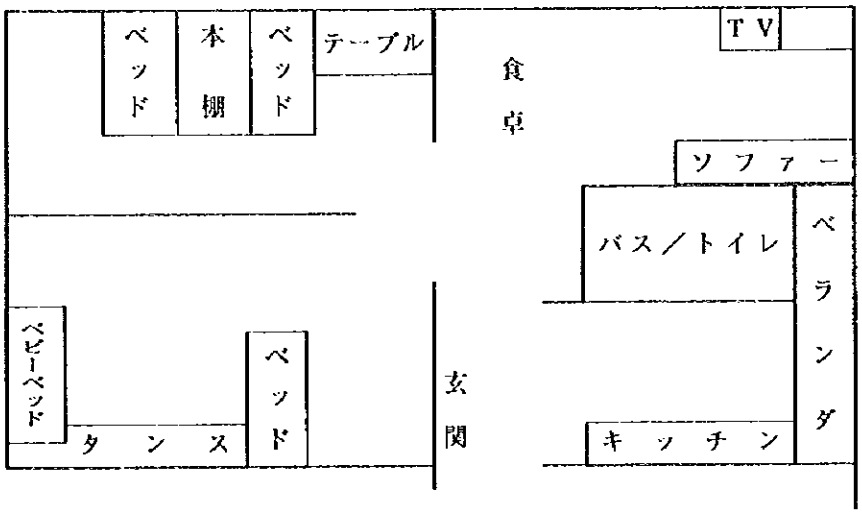
ハ. 住まいの概要

①地理的条件：北京市から車で西へ約1時間半の北京市郊外

②住いの概観：4階建てで、1フロアーに8所帯が住むマンションタイプの住宅団地。社宅として借り受け、古いが異国情緒のある1階に住んでいる。また、住宅団地の入り口にはゲートがあり、ガードマンが24時間外来者のチェックを行っている。

③家　賃　等：1か月約50元(本人支払いの室代)で光熱費は別途支払い。

④室内の概観：様式2LDKで機能的な住まいである。電気用品はほとんど揃っており、自家用車を所有、携帯電話も所持。



ニ．感想

ホームビジットには、団員3名がお世話になったが、前日から受け入れの準備をして下さるなど、大変お世話になり団員の訪問を心待ちにして、本当に心のこもった暖かい歓迎を受け、遅くまで受け入れて下さった房さんご一家に心から感謝を申し上げたいと思う。受入れに関わる団員の感想は詳しく後述しているので参照していただきたい。

5. 訪問国青年団体及び青年活動

(1) 中華全国青年連合会（団体の概要）

1949年に設立された中華全国青年連合会（前身は中華民主青年連合会）は、中国政府の依頼を受け、青年に関する実務管理の職務を代行している組織である。

イ．中国青年の概観

＊中国では、普通14歳から35歳までを青年と定義している。現在の青年人口は約3億人余で、全人口の約25%を占めている。

＊中国は、青年問題についての事柄を非常に重視し、「中華人民共和国未成年者保護法」を1992年に制定している。

＊中国は、青少年教育の問題を極めて重視し、「科学教育による国の振興」を経済と社会発展の基本政策の一つとしており、9年制義務教育を全国的に普及させている。また、職業を持つ青年を対象とする各種成人教育を推進しており、現在までに600万人余の青年に成人教育及び技術トレーニングを実施してきた。

＊中国は、政府による学校運営を推進するとともに、民間など非政府機関などによる学校運営を奨励し、広範な青少年に教育を受ける多様な機会を与え、青年全体の資質向上を図るための有利な条件整備を図っている。

＊その他、今日の中国青年は、社会の公益事業にも前向きの姿勢で参加し、余暇の時間に無償奉仕を原則として、高齢者や、身体障害者などの弱者に対し、自分の提供できる（持っている）能力・技術を提供するボランティア活動に取組んでいる。

ロ．組織及び活動概要

［組織］

1949年5月4日、中華人民共和国の成立を目前に控えて第一回中華全国青年代表者大会が北京市で開催され、そこで中華全国民主青年連盟が誕生した。

'58年4月9日、中華全国第三回青年代表者大会において、同連盟は『中華全国青年連合会（以下、全国青連という。）』と改名し、今日までに合計8回の全国大会が開

催されてきた。

全国青連は中国共産党の指導のもとに、中国共産主義青年団を核心勢力とする各青年団体の連合組織で、中国の各民族各界の青年団体の支援を得た組織である。

全国青連は、団体会員制で、全国的各青年団体と各省、自治区、直轄市の青年連合会などの連合からなっている。現在会員団体は45団体で、12の全国的団体と33の地方団体からなる。

全国青連の最高機関は全国委員会で、構成は各会員団体の推薦による青年代表と全国青連の特別招請による各民族の青年代表からなる個人委員が1,140名で、任期は5年である。この全国委員会で協議・決定された事項について、常務委員会が実務を担当し、常務委員会はまた活動の必要に応じて若干の専門分野を設けることができるとしている。

全国青連の本部は、北京市に置かれている。

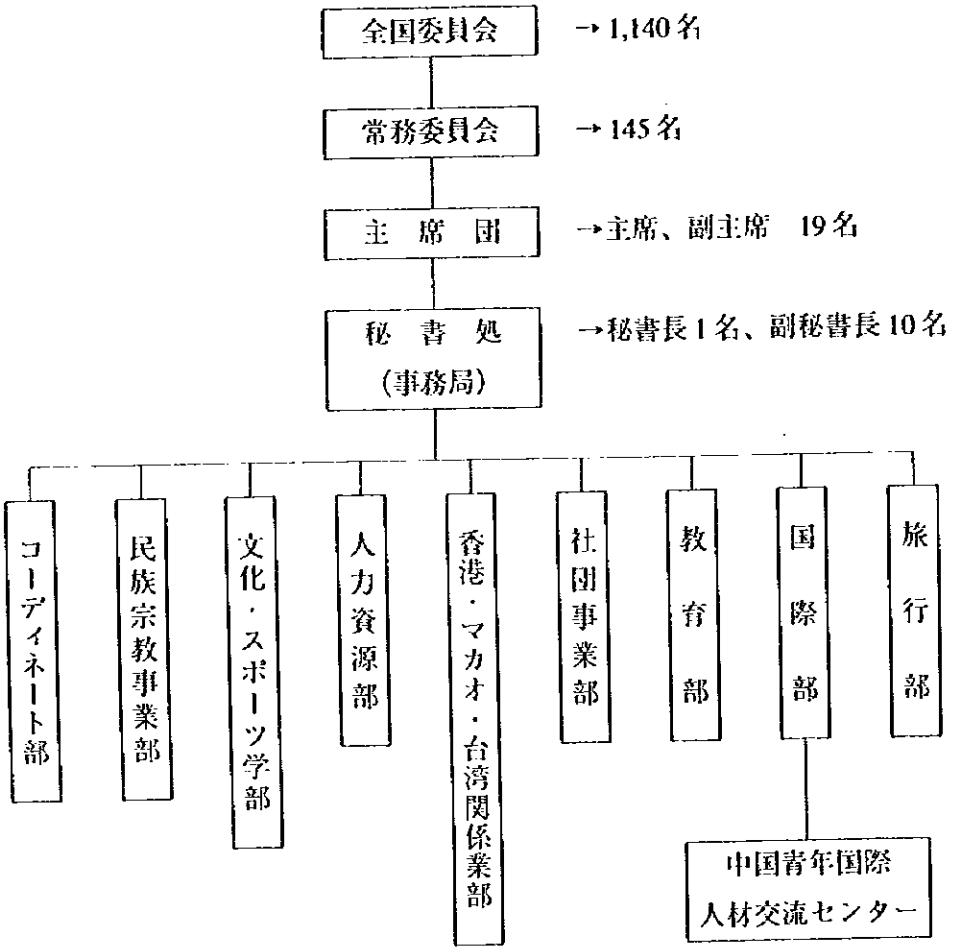
[業務内容]

全国青連の主な業務は、青年が国の改革と建設に参加するよう指導し、青年の成長に有利な条件を各方面から創出し、青年の合法的権益を擁護すること。また、青年が様々な活動に参加できるような場づくりをすること。少数民族地区と宗教に関心のある青年などを通じて、各民族の青年や信仰の異なる青年たちの団結を促すことなどが挙げられる。

また、世界各国・各地区の青年組織と幅広く友好交流と協力を推進し、世界の平和友好事業に取り組むこととしている。全国青連の国際交流は現在100余の国々の政府青年機構、政党青年組織及び民間団体と連携を保ち、二国間または多国間交流で実施されている。また、中国青年は国際社会の一員として、世界各地で助けを必要としている人々に心からの援助の手を差し伸べている。

中国の改革開放事業がますます深化するなか、国家の建設と青少年の国際交流に熱心に取り組み、世界各国の青年と人民と共に人類社会の恒久な平和と持続的進歩のために、今後も貢献していくこととしている。

【機構図】



(2) 中国青年志願者協会(中国青年ボランティア協会)

イ. 団体活動概要

1970年代後半から始まった改革・開放経済で中国では経済の発展とともに拝金主義という問題が発生した。経済的に豊かになる地域がある一方、中国全土で日々の食料にも事欠き、学校にも行けない子どもたちが5,000万人いるという状況の中、'80年代半ば、中華全国青年連合会の呼びかけにより「中国青少年発展基金会」が設立され、青少年の教育問題解決のための"希望プロジェクト"が開始された。学校に通えなかった子どもたちの半分以上が、今では"希望プロジェクト"の成果で通えるようになった。

中華全国青年連合会は、1990年のアジア大会、及び'94年のパラリンピック開催時に全国から多数の青年ボランティアを募集したが、彼等に対し「心の豊かさや精神的豊かさの必要性」をいかにして説明するかという新たな問題に直面した。

そこで、欧米諸国や日本で推進されているボランティア活動におけるボランティア精神に着目した同連合会の提唱により、'94年12月5日に中国青年志願者協会(中国ボランティア協会)が設立されることになった。

党・政府の政策面での指示提案に沿って、各地方(省)にあるボランティア団体の研修・調整・管理などを行っている。もちろん、青年の持つ能力や技能を余暇を利用して、あくまで自発的活動であって報酬を求める活動ではないことを徹底させ、創意工夫をしながら、現在活発に活動を展開している。

現在全国23の省及び、直轄市を含む70%の市に支部が設置され活発な活動が展開されている。

ロ. 事業内容

具体的な事業(プロジェクト)として代表的なものを以下4つが挙げられる。

①ワン・プラス・ワン

＊障害者や高齢者の介護

＊障害児の介護

＊専門家(高齢者)の資料整理などの支援協力

＊失業者のための職業訓練及び雇用促進のための協力

②国内青年協力隊

農業・科学・教育・医療・衛生など専門の技術をもった青年を公開募集し、訓練後、生活手当を支給し、援助対象地域に1～2年派遣し協力活動を展開する。

＊＊＊日本の青年海外協力隊が実施している海外でのボランティア活動及び民間の社団法人青年奉仕協会が実施している国内での1年間ボランティア活動(ボランティア365)をモデルとしているとおもわれた。＊＊＊＊＊＊＊

③大学生による短期ボランティア活動

夏休みを利用し、農村で教育活動に従事する内容で、1995年から開始され、これまでに全国から延べ500万人の大学生が参加している。

④中・高校生の短期ボランティア活動

自分たちの身近な生活圏での交通安全や環境保護活動及び文化活動など、他者への思いやりの心を年少時から育成する体験活動を実践している。

⑤その他、将来へのボランティア活動の取組みについて

国内の青年ボランティアのネットワーク構築と諸外国とのボランティア団体及び活動家との交流促進を行いたいと考えている。

6. 調査団員による所感(感想・提言)

(1) 宮　順子『アフターケアに参加して』

イ.「来日青年との座談会などでの感想と要望」

多くの青年から、「百聞は一見にしかず」という言葉が聞かれたが、これはまさにこの事業の目的が充分に達成されているという評価の一つだと思った。マスコミの映像や活字からだけでは伝わりきれないものを感じることに来日の大きな意義がある。そして、自らの五感を使って感じ取った日本の姿を、それぞれの分野で、様々な方法で伝え、個人の経験だけに終わらせていないという事業は、国を代表して来日した青年の義務を充分に果たしていただいているということでもあろう。また、1か月滞在の研修成果を自分の実績とするために、論文にまとめたり、公の場で発表するなど積極的に報告をおこなっているという。そしてその結果、周囲にも認められ、昇進へのステップとなったという話をうかがい、現代の日本人には欠けている貪欲さや生に対する強い意気込みを感じた。

「来日した時の日本の印象は？」という質問に対し、「日本人は疲れているようだ。まじめだが、柔軟性に欠けているのでは？」という答えが何人かの中国人から返ってきた。1か月という短期間の滞在にもかかわらず、核心をついていると思った。わたしたち日本人は、自己の向上のために、また国際化へ対応できる人材になるためにも、もっと貪欲になった方がいいのではないか。

(要望)

座談会の際、来日青年の方々から出された要望に「先端技術や大企業の見学」が度々上げられたが、どういった分野の先端技術か、大企業のどういったところを研修したいのか(管理、人材育成など)もっと具体的に聞きたかったが、質疑応答の時間がなくなってしまい、残念だった。また、帰国された後で、論文、新聞などを通して日本での研修成果を発表しているとのことだが、そういったものをぜひ送付していただきたい。(中国語でも構わないので)

ロ.「ホームビジットで感じたこと」

毎年、来日青年の日本に対する印象がホームステイ体験後、がらっと変わってしまう理由が理解できたような気がした。最初はホームステイにあまり乗り気ではない青年も、ホスト先から戻った後は、すっかり日本の家庭が好きになり、研修後のアンケート結果を見ても、ほとんどの青年から「ホームステイがとてもよかった」との回

答を得ている。

ホームステイの一番の利点は、公の立場としてではなく、その人個人としてのつきあいができるが故に、言いたいことが言える環境での交流ができることだと思う。今回、訪問させていただいたご家庭は、1994年に来日した房さんのご家庭で、社宅住まいで一般的家庭のようではあるが、かなり裕福な家庭と見受けられた。日本車、大きなテレビ、携帯電話、パソコン、しかもこの日のために駆けつけてくれた房さんの義妹は大卒、義弟も7月に大学卒業予定とのことだった。

房さんの明るい性格のせいか、家庭全体が暖かい印象だ。家に入るなり、天井から吊るされた中国式の提灯に「歓迎！ようこそいらっしゃいました」と日本語で書かれていたことにまず驚いた。隣室の壁にも同様のものが張られていた。テーブルの上には、バナナや葡萄などの果物やお茶、お菓子がたくさん用意され、次から次へと勧められる。奥ではおばあさんが夕食の準備をしてくださっていた。

わたしたちの希望で、餃子の作り方を教えてもらうことになった。わたしたちも一緒に数種類の中身を手作りの皮で包み込む。いつもは、冷凍食品の餃子を電子レンジで暖めているだけのわたしには、なかなかうまく包めない。おばあさんや義妹さんたちは、素早くしかもきれいに波形を付けたり、まるくぷっくりと仕上げている。見かねたおばあさんが、手を取りながらていねいに教えてくれた。1回や2回ではなかなかうまくできないのだが、それでも何度も何度も教えてくれる。言っていることがわからなくても、だんだん、なんとなく意思が通じるようになる。作る数も半端ではないので、30分も夢中で作っていたら、わたしの餃子もだんだん形になってきた。その側で、房さんがおどけた声で歌いながら赤ちゃんをあやし、皆が大笑いする。その時、おばあさんが「うちの息子っておもしろいでしょ、どう？」とわたしの背中から抱きついてきた。「愉快でとても楽しいですよ！」というと、「本当にねえ、今は平和な時代になってこうやって交流ができるんだねえ。」と何度もわたしの頭をなでた。わたしはおばあさんの言った「平和」という言葉に、おばあさんも過去に悲しい思いをし、日本人とこうして笑いながら餃子作りをする日が来るなどとは考えもしなかったのではないだろうかと思った。おばあさんの穏やかな笑顔や暖かい手の温もりは、わたしの祖母や母の手の感触と同じだった。

夕食が始まり、次から次へと料理の皿がテーブル一杯に並べられ、新しい料理が来るたびに義妹や義弟の方々がかいがいしく皿にとってくれる。そして、「新しい出会いに」、「○○さんの健康を祈って」…と何度も何度も乾杯が続く。房さん家族は山東省出身なので料理もこの乾杯もすべて山東省のやり方だという。皆の食事中、おばあさんは一人で台所で一心に料理をする。わたしたちだけ食べていることに何だか気が引け、台所を覗きに行くが、お客さんにたらふく食べてもらうことが一番のもてな

し、と絶対に手伝わせてくれない。こうやって手をかけてくれた料理が緊張感を和らげてくれるだろう。「郷に入っては郷に従え」お腹一杯にいただくことが客の役割と解釈させていただき、十数種類にも及ぶ料理を賞味させていただく。最後に餃子が登場した。おばあさんが、わたしが作ったと思われる形の悪い餃子を取り上げ食べていた。目と目が合うと、にこにこしながらうなづいている。今までで一番おいしい餃子だった。

あまり広くはない居間に10人もの大人がわいわいがやがやっているにもかかわらず、10か月の赤ちゃんは全然泣かない。普段十分にスキンシップされているからだろうとのこと。共稼ぎの家庭で普段おばあさんが世話をしているとのことだが、誰に抱かれてもにこにこしていることから、皆に愛されているのがよくわかる。

帰り支度を始めだすと、おばあさんが泊まっていけと腕を掴む。「今は4時間で東京に来られる時代だから今度はおばあさんが日本に来てください。」と言うと、「わたしはもう年だから…」と首をふる。すると、房さんがおばあさんをかつぐポーズをして、また皆を笑わせる。おばあさんが中国語で、わたしは日本語で話しかけても何となく違和感がないのは、なぜだろう。不思議な気持ちがした。

5時間の訪問の間にいろいろなことを考えた。日本ではだんだん家に人をよぶことがなくなってきている。部屋が狭い、食器がない、料理を作るのが面倒…それでは、どこかのレストランに招待しよう、ということになる。お金をかけることではなく、手をかけてのもてなしの大切さを忘れかけていた。食べることだけではない、自分の家に招くことによってお互いの知らなかった面を知り、つきあいの幅が広がっていく。豊かな人間関係を築くために、相手が日本人であれ、外国人であれ、ありのままの自分を見てもらうことが交流の原点であり、そこにホームステイの意義があると思う。まずは、おばあさんの足元に及ばなくても料理を覚えようと思った。今回のホームビジットは、次回外国人を受け入れる時に大いに参考になる体験だった。

ハ.「雑感」

中華青年志願者協会の活動内容についての説明はとても勉強になった。西洋のボランティアの概念をそのまま導入するのではなく、中国の国情や価値観に合った理念の下での活動は必ずや中国に根づくことだろう。

また、中国社会での人権についての考え方も参考になった。こういった意見が直接中国青年から聞くことができたことが、今回の調査の最大の収穫だった。

ホームビジット先で出会った若い女性が、アメリカのコンピューター関係の企業から、保険会社の営業に転職したという。営業はノルマがあって大変でしょうと話すと、自分はまだまだ経験も浅く、今は様々な人達と出会い、自分を鍛える時期だと思

うからこそ、あえて苦労の多い職を選んだという。そして、将来の夢は画家になること、その勉強のためにもお金をためたいと笑っていたのが印象に残っている。

ずっとわたしたちのお世話をしてくださった全青連の方々を始め、今回会った青年の方々とお話ししていると、こちらにまでエネルギーが流れ込んでくるようなパワーが感じられた。このプログラムで来日する青年の日本での研修は、逆に日本人にとっての研修の場でもある。お互いにないものを学び合う、これこそ国際協力の原点だろう。

心のふれあいとか、交流ということばの概念は非常に漠然としたものである。受け止め方によって重くもあり、軽くもある。研修などを通してそれぞれが感じた「ふれあい」の重さを、一人一人が大切に伝えていきたい。大切なのは、これからの交流だ。一人一人が変われば、家族が、地域が変わっていくということを心から祈っている。

(2) 林　三花『訪中して考えたこと』

イ.「資源」

「ああ、懐かしい。」今回の訪中は1年半の留学を終えて半年ぶりの北京だった。同行した団員の方たちから「何あれ？」と言う驚きが私の驚きだった。市内のあちこちに合弁のデパートがオープンし、車が多く交通ラッシュが日常的な北京しか知らないので、一昔前の北京市の様子を想像するのは逆に困難であった。留学滞在中には縁のなかった市内のホテルに泊まると、洗面所に「あなたの使用したタオルを洗うのに貴重な水が使われます。洗う必要がないと思われる場合はタオル掛けに掛けておいて下さい。ご協力ありがとうございます。」という意味の文章が書いてあった。北京市にいると感じないが、中国の水不足は深刻な問題だと聞く。留学時代に給水制限がある吉林省からきた友達に「今、お水出る時間帯？」と聞かれて驚いた覚えがある。高級なイメージをうちだしているホテルで、このような文章で節水を呼び掛けていることには感心した。

また、中国ではまだ「温飽」(衣食満ち足りること)の解決が重要課題であるのにもかかわらず、都市部では確実に生活水準が向上し、便利さを追求する消費生活者が多くなっている。中国12億の民が日本人のような消費生活を送ることによって、現在の地球上にある資源は枯渇してしまうというデータがあるという。つまり、それだけ日本人は資源を消費しているということである。そこで、日常的に物に不自由しない生活しか知らない私が、自分の生活改善をしないまま聞くのは身勝手な気がするが、機会があれば中国の指導者層の方々に、中国人の生活レベルの向上とそれに伴う資源・環境問題について聞いてみたいと思った。

ロ.「帰国青年との座談会」

帰国青年との座談会では、出席した青年の多くが"日本は西洋文化を上手く取り入れ、東洋文化と融合させ、近代化を進め、近代化と伝統が共存している"という感想を持っていることが分かった。

西洋文化がどうとか、東洋文化がどうとかというような切り口で日本の今を見るということを、私の世代の日本青年はまずしないのではないだろうか。確かに、思想・発想を語る際に、文化的背景の分析から東洋世界の特徴を持ちだすことはあるが、改めて西洋と東洋が融合していると言われると、何だか新鮮に感じられる。

最近、日本では中学生のナイフを使った事件が相次ぎ、世間の注目を集めているが、その話をすると、それはアメリカの影響ではないのかと言われた。中国ではアメリカが話題にあがる頻度が日本に比べて高いように思われた。どうして今の話題からアメリカの話題に飛ぶのかと思う時もある。当たり前のことであるが、日本人とは違ったアメリカ観を持っていて、アメリカとは、西洋世界とは、というものの意識度が違うように感じられる。日本が明治以降に西洋文明の日本における功罪を論じていたのと似ているのだろうか。中華文明とそれに対する西洋文明という図式が人々の思想の中で普遍化しているからなのか非常に興味深いところである。

ハ.「女性」

今回の調査団の団員は4名中3名が女性だったことから、中国女性の強さが話題に上がることが多かった。歓迎宴でもこんな冗談を耳にした。いぜんあるテレビ局で、妻子ある男性を集めて、司会者が貴方の妻を怖いと思うかどうか質問したところ、怖いと思う男性はステージに引かれたラインの向こう側に移動してもらうという番組が放映されたことがある。結果、何十人もの参加者のうち、移動しなかった男性はたったの2人だけだった。男性の司会者は2人の男性は誇りだと称えると、一人の男性は移動すると後が怖いからと答え、もう一人の男性は、妻の指示を仰いでいないから移動することができなかったと言う答えが返ってきたという。ここまでくると笑ってしまうが、私はいつも中国式の在り方が羨ましく、日本の男性も見習ってほしいと思っている。確かに中国でも幹部クラスの人の仕事は激務で男性の比率が高いが、多くの男性は家庭でも女性と同じか、もしくはそれ以上の家事を分担し、女性の社会的地位は日本より高い。

私の過去の中国留学中に受けた質問ベスト3は、①「日本と中国との戦争をどう見るか」②「父親の給料は幾らか」③「日本の女性は結婚すると仕事を止めるというのは本当か」…というものであった。中国では、日本社会の『大男子主義』(男尊女卑の意)はなぜか有名で、今はそこまで酷くはないと思うような事例まで話題に上ることも多

かった。こうしたことから考えてみても、日本男性に中国の一般庶民の家庭にホームビジットしてみるよう勧めたい。

ニ.「ホームビジット」

今回、私たちを受け入れて下さった、房さんの御宅は、あちこちに風船と"熱烈歓迎"や"友好往来"と日本語と中国語で書かれたものが飾られ、迎える我々一行を一家総出で歓迎の準備をして下さりとても感激した。特に、奥さんは子供の教育に大変関心があり、団員の一人である子育て経験者には、いろいろと育児について質問していたが、なんと、妊娠中から胎児教育に関する日本語のテープを聞かせていたということを耳にしてびっくりしてしまった。

ご主人の房さんは、一昨年のアフターケア調査団が訪中した際の交流会に参加しており、私は帰国後、その際の資料から彼の祖父母、伯父、伯母が日本の空襲で亡くなっていたことを知った。しかし、彼はこの友情計画プログラムに参加して来日しホームステイなどの体験を通じて、日本に対する印象が変わったと言う。帰国後は、日本のホストファミリーとは電話をしたり、文通するなどしており、日本語で「四季の歌」まで歌ってくれた。そういう過去が彼を含めて家族にあるにもかかわらず、私たちにホームビジットの機会を与えて下さった、その懐の大きさに感謝する次第である。

一週間の調査を終え、帰宅直後には房さん御一家から、楽しかった思い出が沢山写っている写真と手紙が送られてきた。今度房さんが東京にこられたときは、是非自宅にお招きしたいと考えている。こうしたことからも、ホームステイやホームビジットは、一番リラックスできて、普段の様子がわかり、心温まる交流ができ、その人の生活空間に身を置き、同じ時間を過ごすことで、心の距離は一気に縮まり、お互いの理解が進むプログラムであるとを、私は心から確信した。

ホ.「21世紀友情計画で共に得たもの」

1987年に始まった「日中青年の友情計画」と1990年から始まった「中国実務者招へい計画」の両事業に参加し、訪日した中国青年は約1,800名に上るという。訪日した中国青年の多くが、帰国後は以前より日本に関心を持つようになり、また、訪日経験を行かした仕事に就いたり、日本人の友達ができ文通をしたりして、それぞれ日本との関わりを深めているようである。

こうした日本との友好交流事業に参加した中国青年の同窓会のような組織があれば、横のネットワークができ、さらに面白いのではないかと思うが、やはり難しいのだろうか。私たち「合宿セミナー」参加日本青年にとっても、中国青年と接するのは初めてという者も多く、僅か2泊3日ではあっても、参加したことによって中国語を

始めたいという者や、中国を訪れたいという者もおり、お互いに相手国への関心を高めあい交流が盛んになるという素晴らしい機会が与えられていることに感謝したい。

帰国後、嬉しい知らせが届いていた。それは、昨年の青年招へい事業で来日した経済開発グループの中国側通訳の"ドウさん"が4年間の日本勤務となり来日した。当時の合宿セミナー参加者、日本側のプログラム担当者、通訳、コーディネーターの人たちに早速声をかけ歓迎会を開き、皆で再会を喜び合った。また、コーディネーターが日本での受け入れ直後に訪中し、同様に参加中国青年と再会し、全員の住所録と伝言を携えて帰国した。こうした往来が盛んになることで相互の交流がもっともっと頻繁に行われ、単なる友好交流から深化した交流になるものと楽しみにしている。

最後に、私たち調査団を歓迎して受け入れしてくださり、また様々な情報を提供して下さった、中華全国青年連合会、国際協力事業団中国事務所、在中国日本大使館はじめ多くの中国青年関係者のお世話になった方々、全ての皆さまに心から感謝したい。

特に、中華全国青年連合会の方々の仕事ぶりには、これからの中国をリードして行くのは自分たちであるという意気込みと気迫が感じられ、私自身にも、もっともっと頑張らなければと、とても良い刺激となった。また、現在の日本では誰でも中国を訪れることができるのに対し、中国では誰もが気軽に日本に来れるという状況ではないが、いつの日か日中両国の人々の相互往来が自然なこととなり、一日も早く自然体で日中両国の人との出会いや触れ合いが楽しめるようになることを祈りたい。

(3) 山元　明美『同質の文化を持つ中国を訪れて』

イ.「北京を訪れて」

「どう？変わりはないですか？」心の中で中国大陸と会話を続け、そして二度目の北京と握手した。最初の中国訪問は、天津へ船で入港し汽車で北京市に着いた。今度は飛行機で直接北京市に降り立った。目の中に飛び込んできたのは、やはり広大な大陸であった。現在、併設して建築されている新空港建設用地内を工事用トラックが走り去った後の埃が舞い上がって、風がないままに暫く澱んでいる先の見えない風景。何と不思議な光景なんだろう。でもここはやっぱり北京。「北京、元気にしていましたか。今日から一週間、またいろいろなことを教えて下さい。」

私たちの先人たちがこの大陸で何を見つめ、何を考え、何を学んだのか。ますます北京のことを知りたくて浮き浮きしてしまった。過去に北京でお会いした人々は「古き友人」と親しげに歓迎してくれる。大陸のように大きな懐で人を包み込み、心温まる歓迎ぶりは何処にいっても表れる。そこが中国大陸、何故だろう？…すぐお隣の国なのに。大地を底から震わせる13億の人口をもつ中国。北京だけを知る限りでは豊

かに見える、そして中国独特の共同体がしっかりできあがっている。人々の揺るぎない生活基盤の上にしっかりと立っている。

しかし、多くの観光客が訪れるようになり、中国大陸は大きく生まれ変わろうとしている。やがて、その変動は中国大陸全土に及んでいくのだろうか。それは、北京市の発展を意味するものかもしれないが、勝手な郷愁で言わせてもらうならば、一抹の寂しさを感じる。

北京の街を歩いていると、いたるところで目につくものがある。それは前回は気付かなかったが、歩道の上での散髪屋さんが多く見受けられ、相変わらず人も車も多かったことであった。北京滞在中にこんな質問をぶつけられたことがあった。「仙人が雲の上から今の北京の街を見下ろすと、黒い虫と黄色い虫がたくさんいると言う」「それはどんな虫か分かりますか」「今に黄色い虫はいなくなりますよ」なんとなく謎々のような質問に、その答えを聞いて考えさせられてしまいました。"黒い虫は自転車に乗った人間"で"黄色い虫はタクシー"でした。冗談のような会話の中にも大きく変わりつつある中国の一面を見たような気がした。

ロ.「北京と沖縄との関係」

ここ中国には沖縄と共通点がとても多かった。そうした共通点が話題に挙がると「私も沖縄に行ってきました。あなたの言うとおり沖縄には大変自分たちに近いものを感じます。特に、食文化はほとんど変わりませんね。」と中国の人々も同じことを言う。沖縄と中国を結ぶ一本の文化の道が見えたような気がして嬉しく思った。北京市は中国でも、北であり、南の方へ行くともっと沖縄との親近感がわくであろう。

中国は、食文化の国だから食べるものは何でもある。私たちは一度として同じ食事をいただくことはなかった。(このことは、中華全国青年連合会の気配りであったことではあるが)

中国の奥深い文化的資質と豊かな自然、5,000年の歴史を誇る膨大な中国に、僅か一週間という限られた時間の中では、私がいかに精力的に動こうが、その理解には自ずと限界がある。しかし、私は貪欲にこの目で北京を見、できるだけ多くの人々と出会い多くのものを吸収しようと努力した。

ハ.「心温まるつきあい～ホームビジットから」

北京市内を幾度となく走り続け……でも何処にいるのか？さっぱり分からない。分かっているのは「ここは間違いなく北京である。」ということだけである。交通渋滞を抜け、北京郊外西方へ車に揺られること約1時間、小雨の中、表通りで大きく両手を振りかざしている、その人こそ、ホームビジットでお世話になるお宅のご主人、房さ

んであった。

何やら中国語で話しかけている様子だが、でも良く耳を澄まして聞いていると、なんとそれは中国訛の日本語であった。「ようこそ！いらっしゃいました。」と微笑ましくも嬉しく思い感激した。房さんに案内されるままに玄関へ……ドアを開けるとお部屋一杯に"熱烈歓迎"の垂れ幕が下がっていた。そこには奥様の童花さんと生後四か月の赤ちゃんと、そして房さんのお母さん、義理の妹弟の家族総出で迎えてくれなどして、まるで十年来の知己を迎えるような歓迎ぶりであった。

私は、初めての家庭訪問に期待と好奇心で胸のはずむ思いであった。家の間取りはほとんど日本のアパートやマンションの間取りと変わりなく親近感を覚えた。「どうぞ、どうぞ。」と居間へ私たちを案内してくれる房さんの明るさともてなしに、訪問するまでの緊張感がふっと緩んでしまった。

私たちの訪問前日から、材料の下準備をするなどして待っていた房さんのお母さんの指導で、手作り餃子の講習会が始まった。なかなか包み込むことができない私の手をそっと支えつつ「何度もつくれば上手になるよ。」と励ましてくれる。いつの間にか100個近い数の餃子を作ってしまった。ちょっと作り過ぎかなと気にしているまもなく、次から次に運ばれてくる料理にびっくりしていると、今度はあっというまにテーブル一杯に、美しい花が咲いたように料理が並べられたのには、しばし唖然としてしまった。こんどは、食事が始まると余りの美味しさに身動きが取れないほどに食べてしまった。正確には、房さんの客をもてなす賑やかな、そして明るい雰囲気の中で食べさせられてしまったと言うべきである。

私も家庭の主婦として、こんなにも沢山の種類の料理をどのように作られているのか台所を拝見させてもらった。意外にも狭い台所で、私は自分の台所に立つ姿を思い浮かべ、もっと食の豊かさと丁寧な暮らしを心掛けなければならないと反省した。食事が進むうちに、房さん一家の温かい人柄のおかげで私もすっかりリラックスし、日本語と中国語のチャンポンでの会話で食卓の話題も賑やかに弾み、房さんの奥さんとは母親としての共通点もあり、子育ての話題に集中した。食事の間、大人たちが自分たちの会話を楽しんでいる最中にも子供に声をかけ、あやし、スキンシップに心掛けており、子供がいかに大切に育てられているかを目のあたりにして感動した。そういえば、41歳になる房さんを抱き締めてお母さんが「私の息子はどうですか。」と尋ねられたことにはびっくりした。でもその様子がとても微笑ましく「とても素敵な息子さんですね。毎日が明るく楽しい家庭でしょうね。」と応えると、お母さんは「そうです。そうです。」とにこにこ満足そうであった。

楽しかった房さんのお宅を辞する時、「今は平和でいいですね、本当に心温まるお付き合いができて良かったですね。」と述べられたお母さんの言葉が印象的で今でも忘

れることなく耳に残っている。過去に中日間の不幸な体験をしたことであろうお母さんの言葉には、私が感じた以上の万感の思いが込められていたことだと思うまた、中国の人々が「友、遠方より来り、また喜ばしからずや。」という格言どおりに、その懐の大きさで私を包み込んでくれたことに心から感謝し、「私の家は貴方の家ですよ。また、いつ来ても永遠に貴方の家ですよ。」という、私にとって、とても有り難く、心温まる言葉を背に房さん一家を後にした。

今回のアフターケア調査団の一員として参加した私にとっての中国滞在は、改めて国際交流の真の意味を問い直す意義深いものであった。北京滞在中、私たちのために様々な便宜を図られた中華全国青年連合会をはじめ多くの皆様に心から感謝したい。

JICA